

# 那 珂 90

— 那珂遺跡群第179次調査報告 —

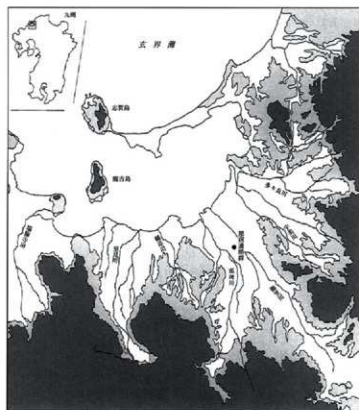
2 0 2 4

福岡市教育委員会



# 那 珂 90

— 那珂遺跡群第179次調査報告 —



遺跡略号 NAK-179  
調査番号 1962

2024

福岡市教育委員会





那珂遺跡群 179次調査区全景（東上空から）



那珂遺跡群 179次東側調査区（西から）

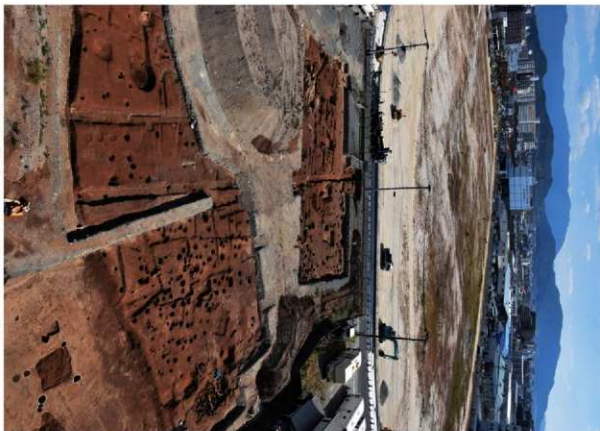




那珂 179 次調査区全景 I 区 II 区 III 区 IV 区







那珂遺跡群 179 次東側調査区 (西から)



那珂遺跡群 179 次調査Ⅱ区全景 (北から)





那珂遺跡群 179 次調査 I 区廃棄土坑 (東から)



那珂遺跡群 179 次調査 I 区廃棄土坑 (北から)





A



B

那珂遺跡群 179 次調査 I 区 SK04 出土鋳型



那珂遺跡群 179 次調査 II 区 SC22 出土鳥形土製品



## 序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古くから交流がおこなわれてきました。なかでも博多湾岸部には、先史時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の都市化により失われる文化財を保護し、後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、福岡平野に立地する那珂遺跡群第179次調査について報告するものです。この発掘調査では弥生時代の貯蔵穴や古墳時代の集落、飛鳥時代の区画溝などが検出され、弥生時代の青銅器鋳型や古墳時代の鳥形土製品のほか古代～中世にかけての遺物が出土しました。これらは郷土の歴史の解明するうえで重要な資料となるものです。

本書が文化財保護にたいする理解を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご指導を賜りました。心より御礼申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会  
教育長 石橋 正信

## 例言

1. 本書は福岡市が、平成 31～令和 2 年度に福岡市博多区那珂 6 丁目 333 番 1 で実施した那珂遺跡群第 179 次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、受託事業として実施した。
3. 実測図作成および写真撮影の実施は、以下のとおりである。

業務内容	担当者
遺構実測図作成	常松 幹雄、藤野 雅基、野村 俊之、坂口 剛毅、瓜生 健
遺構写真撮影	常松、空中写真企画
遺物実測図作成	山崎 龍雄、山崎 賀代子
遺物写真撮影	常松、(株) 写測エンジニアリング
製 図	常松、山崎 龍雄、山崎 賀代子

4. 本文に掲載した公共座標は世界測地系である。
5. 本文中に掲載した方位は、座標北を示す。
6. 本書に使用した国土地理院データは福岡市 WEBGIS の情報をもとに作成したものである。
7. 本文中に使用する遺構略号とその性格は、以下のとおりである。  
SB：掘立柱建物 SC：住居跡 SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 P：柱穴 SX：その他の遺構
8. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
9. 本書の編集・執筆は常松が行った。

遺跡名	那珂遺跡群	調査回数	179 次	調査略号	NAK - 179
調査番号	1962	分布地区図幅名	024 板付・038 塩原	遺跡登録番号	0085
調査地	福岡市博多区那珂 6 丁目 333 番 1			調査面積	2,585 m <sup>2</sup>
調査期間	令和 2 (2020) 年 2 月 10 日～令和 2 (2020) 年 12 月 18 日				
整理期間	令和 3 (2021) 年 4 月 1 日～令和 6 (2024) 年 3 月 31 日				

## 本文目次

第 I 章	はじめに	1
第 II 章	位置と環境	2
第 III 章	調査の記録	4
第 IV 章	I 区	6
第 V 章	II 区	34
第 VI 章	III 区	54
第 VII 章	SD05 II・III 区	60
第 VIII 章	IV 区	66
第 IX 章	結語	67



## 挿図目次

図 1	那珂遺跡群の立地 (s=1/25,000)	3
図 2	那珂遺跡群 179 次と周辺の調査区 (s=1/2,000)	5
図 3	179 次調査 I～IV 区の遺構配置図 (s=1/300) (折込み 1)	
図 4	179 次調査 I 区の遺構配置図 (s=1/160) (折込み 2)	
図 5	I 区 SD01・出土遺物 (s=1/80・1/3)	7
図 6	I 区 SE03・出土遺物 1 (s=1/40・1/3)	8
図 7	I 区 SE03 出土遺物 2 (s=1/3)	9
図 8	I 区 SK04 実測図 (s=1/80)	10
図 9	I 区 SK04 出土遺物 (s=1/3)	10
図 10	I 区 SK04 出土鋳型 (s=1/2)	11
図 11	I 区 SX20 出土遺物 (s=1/3・1/1)	12
図 12	I 区 SP23・30、SX31、SK37 出土遺物 (s=1/3)	13
図 13	I 区 柱穴及び検出面出土遺物 (s=1/3・1/1)	14
図 14	I 区 SC58・59 出土遺物 (s=1/3)	15
図 15	I 区 SK67・SX70・SC75 出土遺物 (s=1/3)	16
図 16	I 区 SB48、SK71・72・73・76 実測図 1・2 (s=1/80・1/40)	18・27
図 17	I 区 SK71 出土遺物 (s=1/3・1/1)	19
図 18	I 区 SK72 出土遺物 1 (s=1/3)	20
図 19	I 区 SK72 出土遺物 2 (s=1/3)	21
図 20	I 区 SK72 出土遺物 3 (s=1/3)	22
図 21	I 区 SK72 出土遺物 4 (s=1/3)	23
図 22	I 区 SK73 出土遺物 1 (s=1/3)	24
図 23	I 区 SK73 出土遺物 2 (s=1/3)	25
図 24	I 区 SK76 出土遺物 (s=1/3)	26
図 25	I 区 SD43・SC74 実測図 (s=1/80)	29
図 26	I 区 SC74 実測図 (s=1/60)	30
図 27	I 区 SC74 竈実測図 (s=1/20)	31
図 28	I 区 SC74 出土遺物 (s=1/3)	32
図 29	179 次調査 II 区の遺構配置図 (s=1/160)	35
図 30	II 区 SD07、SC08、SD09、SK10 出土遺物 (s=1/3)	37
図 31	II 区 SC11 実測図 (s=1/40)	38
図 32	II 区 SC11 出土遺物 1 (s=1/3・1/1)	39
図 33	II 区 SC11 出土遺物 2 (s=1/3)	40
図 34	II 区 SC11 竈跡実測図 (s=1/30)	40
図 35	II 区 SK14・15 実測図 (s=1/40)	42
図 36	II 区 SK14・15・18、SC19 出土遺物 (s=1/3)	43
図 37	II 区 SC22 実測図 (s=1/40)	44
図 38	II 区 SC22 出土遺物 (s=1/2)	45
図 39	II 区 107・441 検出面出土遺物 (s=1/3・1/1)	45
図 40	II 区 SB56・67・68 実測図 (s=1/60)	46
図 41	II 区 SC17 実測図 (s=1/40)	47
図 42	II 区 SC19 実測図 (s=1/40)	48
図 43	II 区 SB69、SK08・10 実測図 (s=1/40)	49
図 44	II 区 SE06、SK18 実測図 (s=1/40)	51
図 45	II 区 SK102・103 実測図 (s=1/20)	52
図 46	179 次調査 III 区遺構配置実測図 (s=1/200)	53
図 47	III 区 SK39 貯蔵穴・出土遺物 (s=1/40・1/3)	55
図 48	III 区 SC54 実測図 (s=1/40)	56
図 49	III 区 SC53・54・56、SK61 出土遺物 (s=1/3)	57
図 50	III 区 SK62 木棺墓・出土遺物 (s=1/20・1/3)	59
図 51	II・III 区 SD05 実測図 (s=1/160・1/20) (折込み 3)	
図 52	II 区 SD05 出土遺物 1 (s=1/3)	61
図 53	II 区 SD05 出土遺物 2 (s=1/3)	62
図 54	III 区 SD05 F・D 区ほか出土遺物 3 (s=1/3)	63
図 55	III 区 SD05 E・F 区出土遺物 4 (s=1/3)	64

図 56	Ⅲ区 SD05 D・E・F 区出土遺物 5 (s=1/2) . . . . .	65
図 57	Ⅳ区遺構配置実測図 (s=1/160) . . . . .	66
図 58	Ⅳ区 SB82 実測図 (s=1/40) . . . . .	66
図 59	比恵・那珂遺跡群における古墳時代後期～古代の遺構分布 . . . . .	68
図 60	那珂遺跡群における古墳時代後期～古代の遺構分布 . . . . .	69
図 61	179 次調査出土跡型による復元モデル (s=1/2) . . . . .	71

## 図版目次

図版 1	北側遠景 1 (南から) 北側遠景 2 (南から)
図版 2	南側遠景 1 (北から) 南側遠景 2 (北から)
図版 3	I 区南西 SD01 (南東から) I 区南西拡張区全景 (南東から)
図版 4	I 区全景 (北東から・2020 年 4 月)
図版 5	I・Ⅱ・Ⅲ区全景 (北東から・同 4 月)
図版 6	I 区全景 (北東から・2020 年 5 月) I 区西側全景 (北東から・同 5 月)
図版 7	I 区 SE03 半裁状況 (北東から) I 区 SE03 完掘状況 (北東から)
図版 8	I 区 SK04 鋳型出土状況 (東から) I 区 SK04 出土の鋳型 (南から)
図版 9	I 区廃棄土坑全景 (北東から) I 区廃棄土坑 SK71 (東から)
図版 10	I 区廃棄土坑遺物出土状況 (北東から) I 区廃棄土坑遺物出土状況 (西から)
図版 11	I 区廃棄土坑遺物出土状況 (北から) I 区廃棄土坑遺物出土状況 (北から)
図版 12	I 区廃棄土坑 SK76 (北東から) I 区出土遺物 1
図版 13	I 区出土遺物 2
図版 14	I 区出土遺物 3
図版 15	I 区出土遺物 4
図版 16	I 区 SC74 (東から) I 区東全景 1 (東から)
図版 17	I 区 SC74 竈跡 (西から) I 区 SC74 竈跡 (東から)
図版 18	I 区 SX43 中世地業 (南から) I 区 SX43 中世地業 (東から)
図版 19	Ⅱ区全景 (北から・2020 年 5 月)
図版 20	Ⅱ区 SC11 (北から) Ⅱ区 SC11 (西から)
図版 21	Ⅱ区 SC11 (西から) Ⅱ区 SC11 (北から)
図版 22	Ⅱ区 SC11 (西から) Ⅱ区 SC11 (北から)
図版 23	Ⅱ区 SC11 竈跡下層 (北から) Ⅱ区出土遺物
図版 24	Ⅱ区 SC22 (東から) Ⅱ区 SC22 (西から)
図版 25	Ⅱ区 SC22 鳥形土製品出土状況 (西から) Ⅱ区 SK08 (西から)
図版 26	Ⅱ区 SC17 (東から) 1 Ⅱ区 SC17 (東から) 2
図版 27	Ⅱ区 SC19 (東から) 1 Ⅱ区 SC19 (東から) 2
図版 28	Ⅱ区 SK102、SK103、SE06
図版 29	Ⅱ区 SK14 (南から) Ⅱ区 SK14 (東から)
図版 30	Ⅱ区 SK15 (東から) Ⅱ区 SK18 (東から)
図版 31	Ⅱ区 SK10 上層 (東から) Ⅱ区 SK10 (東から)
図版 32	Ⅱ区発掘作業風景 (北から)
図版 33	Ⅱ区 SC11 発掘風景 (北から) Ⅱ区 SD05 遺物出土状況 (B 区)
図版 34	Ⅱ区 SD05 遺構検出状況 (西から・2020 年 2 月) Ⅱ区発掘作業風景 (西北から・同 3 月)
図版 35	Ⅱ区 SD05 (西から) Ⅱ区 SD05 拡張区 (西から)
図版 36	Ⅱ区 SD05 A 区 (西から) Ⅱ区 SD05 A・B 区 (西から)
図版 37	Ⅱ区全景 (東から) Ⅱ区 SD05 A・B 区 (西から)
図版 38	Ⅱ区 SD05 Z 区 (東から) Ⅱ区 SD05 Z 区土層 (西から)
図版 39	Ⅲ区全景 (北西から) Ⅲ区全景 (西から)
図版 40	Ⅲ区 SK62 発掘風景 (北から) Ⅲ区 SK62 (西から)
図版 41	Ⅲ区 SK62 (北から) Ⅲ区 SK62 (東から)
図版 42	Ⅲ区 SK62 (東から) Ⅲ区 SK62 出土遺物
図版 43	Ⅲ区 SK39 (南から) Ⅲ区 SK39 (南から)
図版 44	Ⅱ区 SD05 全景 (西から) Ⅱ区東調査区全景 (西から)
図版 45	Ⅱ区 SD05 (西から) Ⅲ区 SD05 (東から)
図版 46	I 区から南側をのぞむ (北から) Ⅲ区 SD05 SK39 (北から)
図版 47	I 区拡張区作業風景 1 (南から) I 区拡張区作業風景 2 (北から)
図版 48	Ⅳ区全景 (南から) Ⅳ区全景 (東から)

## 第I章 はじめに

福岡市教育委員会は、令和元年8月8日に提出された福岡市博多区那珂6丁目333番1における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した（事前審査番号2019-2-525）。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれることから令和元年11月5日に試掘調査を行い、かつて建築物があった地表面直下においても遺構の存在を確認したことをうけて協議を行った。その結果、計画された開発にたいして埋蔵文化財への影響は回避できないとみられることから、約2,000㎡について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和2年1月17日に西日本鉄道株式会社と福岡市で埋蔵文化財調査業務委託契約書を交わし、発掘調査を令和2年2月12日から令和3年1月15日にかけて行い、令和3・4年度に資料整理および報告書作成を実施することとした。

発掘調査は、令和2年2月10日～令和2年12月18日の間で実施し、資料整理および報告書作成は令和3年度から5年度に及ぶものとなった。

調査は10か月余にわたるものであったが、西日本鉄道株式会社をはじめとする関係者各位には発掘調査の条件整備などについて迅速な対応をはかっていただいた。

また調査内容の公開についてもご理解をいただき、埋蔵文化財センター主催の考古学講座—発掘調査速報編—（2021年1月16日）において調査成果の周知の機会をもうけることができた。さらに資料の展示を実施し市民への公開をはかることができた。

### 調査の組織

**調査委託：**西日本鉄道株式会社

**調査主体：**福岡市教育委員会

（発掘調査：平成31～令和2年度・資料整理：令和3～5年度）

**調査総括：**文化財活用部埋蔵文化財課課長 菅波 正人

同課調査第1係長 吉武 学（平成31～令和2年度）

本田浩二郎（令和3～5年度）

同課調査第2係長 大塚 紀宜（平成31年度）

藏富土 寛（令和2～3年度）

井上 嗣子（令和4～5年度）

**調査庶務：**文化財活用課

松原加奈枝（平成31～令和2年度）

井出 瑞江（令和3年度）

内藤 愛（令和4～5年度）

**事前審査：**埋蔵文化財課 事前審査係長

本田浩二郎（平成31～令和2年度）

田上勇一郎（令和3～5年度）

同課事前審査係 文化財主事

朝岡 俊也（平成31年度）

神 啓崇（令和4年度）

三浦 萌（令和5年度）

**調査・報告担当：**同課 主任文化財主事

常松 幹雄

調査ならびに資料整理にあたっては、後藤直（東京大学名誉教授）下條信行（愛媛大学名誉教授）岩永省三（九州大学教授）宮本一夫（九州大学教授）田尻義了（九州大学准教授）下村智（別府大学教授）玉川剛司（別府大学准教授）清水邦彦（茨木市教育委員会学芸員）森岡秀人（関西大学非常勤講師）若林邦彦（同志社大学教授）吉田 広（愛媛大学教授）石川日出志（明治大学教授）柳田康雄（國學院大学客員教授）春成秀爾（国立歴史民俗博物館名誉教授）藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館教授）細川金也・村松洋介（佐賀県）比佐陽一郎（奈良大学教授）をはじめとする各位から出土資料等についての有益なご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。（敬称略 所属等は調査時）

## 第Ⅱ章 位置と環境

比恵・那珂遺跡群は、福岡平野の中央部、那珂川と御笠川にはさまれた標高5～13mの洪積低丘陵上に展開する総面積140haの大規模な複合遺跡である。鹿児島本線をはきんで南には五十川遺跡、井尻A・B遺跡、南東には諸岡A・B遺跡が分布しており、南東の須玖の丘陵へと連なる。諸岡川の東には板付・高畑遺跡さらに麦野AB遺跡が立地している。

那珂遺跡群179次調査地は、那珂遺跡群南端の丘陵が東西300mほどに狭小になった地点に位置している。

調査区の西側には丘陵を南北に縦断する道路状遺構がはしっている。北西約500mの那珂中央公園の調査(114次調査)では幅6～7mで側溝をもつ古墳時代前期の道路跡がおよそ100mにわたって確認されている。側溝の西延長部は竹下線道路の拡幅に伴う32次調査で確認されており道路遺構は那珂八幡古墳前方部の西側を通ることが想定されている。また114次調査の南では9次・48次調査区で側溝の延長とみられる遺構が確認されている。

179次調査区は予定建築物の配置をもとに調査区をⅠ～Ⅳ区にわけた。調査前は工場の建物があり、遺構の上面の標高は、削平をうけたⅠ区西側が7m、東側で8m、Ⅱ区およびⅢ区は8m程度であった。179次調査区は48次調査と鹿児島本線の南で確認された111次調査区(年報VOL.20)の間に位置している。111次調査では標高9mで検出された南北方向の溝から6世紀代の土器類が検出された。179次調査Ⅰ区東端で検出された溝は、道路状遺構の側溝の一部である可能性がある。

またⅡ・Ⅲ区を横断する全長60mあまりの東西方向の溝S D 05はⅢ区西端の削平で途絶えている。排水機能をもつ溝S D 05は、試掘調査によって八女粘土層が途絶える旧青果市場の敷地まで伸びないことが確認された。

現況道路の西側に位置する西鉄バス竹下営業所の174次調査(1393集)では遺構面の高さ約9.5mにたいして7世紀代の溝状遺構は確認されていない。調査区の西側には道路状遺構が通ることから、溝はその手前で途絶えるか北東に屈曲するとみられる。56次調査では真北方向の柱筋をもつ古代の掘建柱建物跡が検出された(1082集)。

179次Ⅰ区南西では南西側に下がる落ち際は確認された。この落ち際は水道敷設にともなう117次調査で確認された落ちと関連するとみられる(1034集)。

### 【参考文献】

- 平凡社 2004「福岡県の地名」『日本歴史地名大系』第41巻
- 福岡市教育委員会 2007「福岡市埋蔵文化財年報VOL.20—平成17(2005)年度版—」
- 福岡市教育委員会 2009「那珂 53」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1034集
- 福岡市教育委員会 2010「那珂 56」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1082集
- 福岡市教育委員会 2020「那珂 82」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1393集

### 遺跡名(図1)

1. 那珂遺跡群
2. 比恵遺跡群
3. 山王遺跡
4. 五十川遺跡
5. 那珂君休遺跡
6. 板付遺跡
7. 高畑遺跡
8. 諸岡A遺跡
9. 諸岡B遺跡
10. 井尻A遺跡
11. 井尻B遺跡
12. 井尻C遺跡
13. 笹原遺跡
14. 三筑遺跡
15. 麦野A遺跡
16. 麦野B遺跡
17. 麦野C遺跡
18. 南八幡遺跡
19. 横手遺跡
20. 寺島遺跡
21. 日佐遺跡
22. 須玖・岡本遺跡
23. 大橋E遺跡
24. 三宅B遺跡
25. 三宅C遺跡
26. 野多目A遺跡
27. 板付東遺跡
28. 井相田D遺跡
29. 仲島遺跡
30. 井相田C遺跡
31. 東那珂遺跡
32. 雀居遺跡
33. 下月隈C遺跡
34. 立花寺B遺跡
35. 久保園遺跡
36. 栗田大谷遺跡
37. 宝満尾遺跡
38. 天神森遺跡
39. 下月隈A遺跡
40. 下月隈B遺跡
41. 上月隈遺跡
42. 笠接遺跡
43. 御陵遺跡
44. 日佐原遺跡
45. 弥永原遺跡
46. 雑輪隈遺跡
47. 駿河遺跡

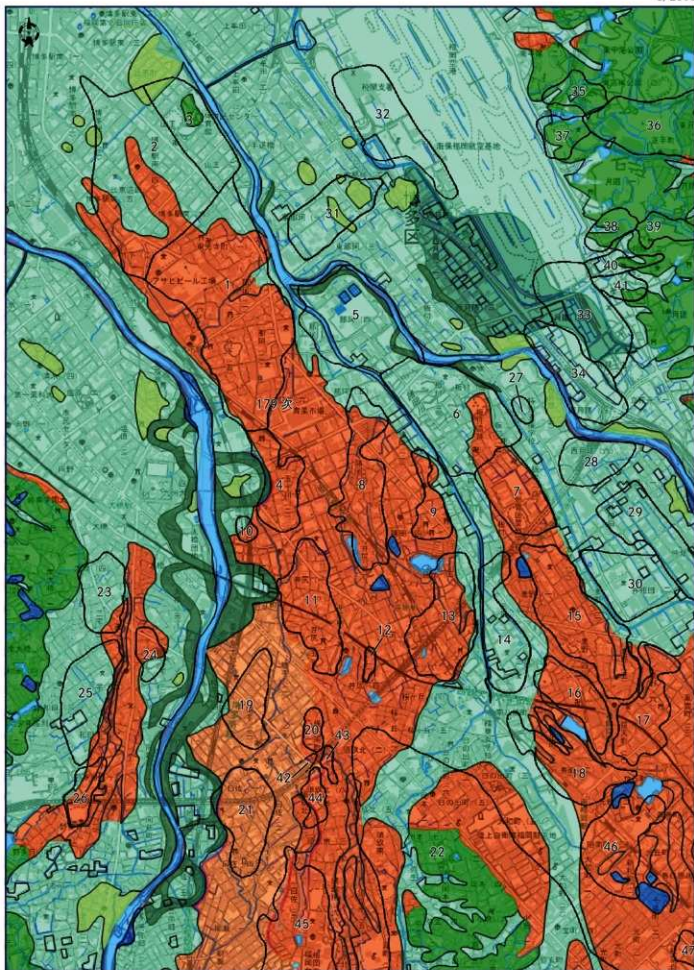


図1 那珂遺跡群の立地 (S=1/25,000)

0 1km

### 第三章 調査の記録

発掘調査は2020年2月10日から表土掘削に着手した。

2月27日には、Ⅰ区の南西隅の古代の土坑から銅剣の鋳型が出土した。両面范で、細身で鋒が長い。被熱による黒変がみられる。石材は暗褐色を呈していた。

第Ⅱ区：第Ⅰ区東のⅡ区で東西方向の溝（SD05）を検出。溝の断面は逆台形で東に向かって傾斜していた。丸瓦の破片を含む。溝はⅠ区とⅡ区の間を拡張（Ⅲ区）によって約32mを確認した。

4月は、第Ⅰ区は南西部の溝と池状の窪みを中心に掘削した。

Ⅱ区東部のⅡ区では古墳時代の住居跡4軒を検出した。6世紀代に比定される。

中央の住居跡SC11は1辺6mの方形プランの住居跡で、竈部付近で支脚が立った状態で検出された。第Ⅱ区の南で検出された住居跡SC22では床面で鳥形土製品が出土した（4月9日）。時期を特定する遺物はないが、周囲の遺構分布などから古墳時代後期と推定される。

Ⅱ区で検出された東西方向の溝（SD05）は、Ⅰ区北側のⅢ区を含めて約60m延びていることを確認した。時期は7世紀後半を主体とする。

2020年4月は、作業員を増員したことで以降の掘削は順調に進んだ。

第Ⅰ区：西端の道路状遺構の東側の側溝を掘削した。

第Ⅱ・Ⅲ区：Ⅱ区で検出された東西方向の溝（SD05）60mを掘削。7世紀後半の須恵器を伴う。

第Ⅱ区の南で2×2間の総柱建物を検出した。

第Ⅲ区を北側に約10m拡張し、弥生時代の貯蔵穴1基を検出した。

5月は好天に恵まれ掘削は順調に進んだ。高所作業車により全景を5月27日に撮影した。

6月は、Ⅱ区で掘立柱建物4棟を確認した。Ⅲ区を北側に拡張し、古代の木棺墓1基を検出した。

7月は、Ⅰ区：東でL字プランの中世の地業を検出した。Ⅱ区で検出された東西方向の溝（SD05）は7世紀後半から8世紀前半の須恵器を含む。

8月は6日に空撮を実施した。

Ⅲ区北側で検出された木棺墓は供献された黒色土器から10世紀代と推定される。

調査区北西でⅣ区を拡張した。Ⅰ区と繋がる南北方向の古代の溝が検出された。

Ⅰ区：東南に分布する7世紀中頃の遺構は廃棄土坑で、調査区の南に拡張するとみられる。

Ⅱ・Ⅲ区では東西溝SD05の延長部の拡張をおこなった。Ⅲ区を北側に拡張した。

Ⅳ区については測量終了後に埋戻しを行った。

9月はⅠ区東南の7世紀代の土坑を拡張した。土坑は本来径10mほどの範囲に須恵器や瓦類を廃棄したとみられる

Ⅱ区：東西にのびる7世紀後半の溝は、東に直線的に伸びていることを確認した。東側の隣接地に延長部が確認できないことから、調査区東の道路部分で台地の落ち際になるとみられる。

Ⅲ区を北側に拡張し、建物の基礎による攪乱を確認した。Ⅳ区は埋戻しを終了。

10月はⅠ区東南拡張区で7世紀中頃の廃棄土坑を完掘した。本来径8m程度の土坑だったとみられる。

Ⅱ区の東西にのびる7世紀後半の溝は、東端で八女粘土を検出した。杭の痕跡が多く、排水路に設けられた欄状の遺構と推定される。

Ⅰ区東からⅢ区南の掘削・記録を逐次すすめ12月18日までに調査区全体の埋戻しを完了し、撤収を完了した。

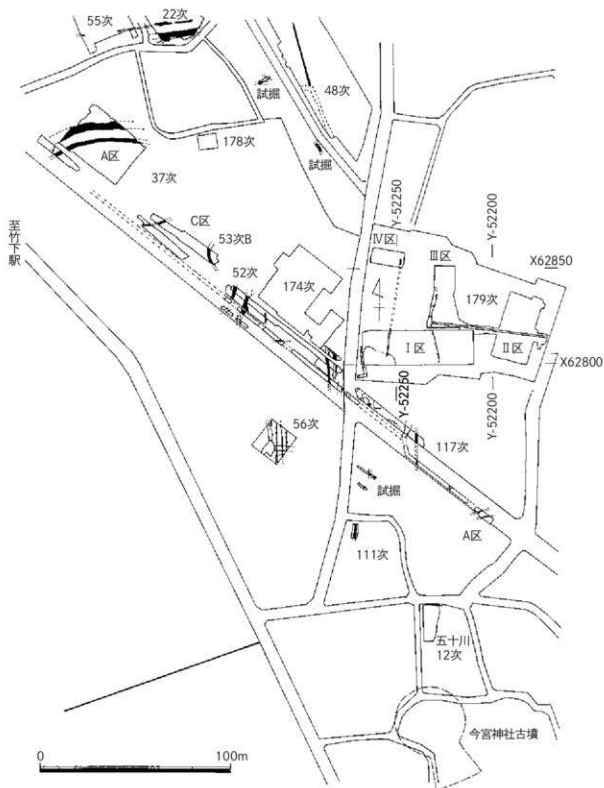


図2 那珂遺跡群 179次と周辺の調査区 (S=1/2,000)



図3 179次調査I～IV区の遺構配置図 (S=1/300)







図4 179次調査I区の遺構配置図 (S=1/60)



## 第IV章

2月から着手した179次調査は、およそ10か月の期間で記録保存を行うことができた。調査区はI～IV区で、調査面積は下記のとおりである。

I区…1,193㎡ II区…716㎡ III区…526㎡ IV区…150㎡ 計2,585㎡

各区の遺構および出土遺物の概要は下記のとおりである。

I区…西側 古墳時代の道路の側溝 古代の区画溝・窪み、中世の井戸1基  
※青銅器跡型

東側 6・7世紀代の住居跡・土坑 中世建物の基礎地業

II区…6世紀代の住居跡・掘立柱建物 ※鳥形土製品

III区…弥生時代の貯蔵穴1基 6世紀代の住居跡 10世紀代の木棺墓1基

II区～III区…7世紀後半の溝、東側に傾斜する。

IV区…I区で検出された古代の区画溝の延長部  
遺物の総量はコンテナ60箱程度にのぼる。

本書では須恵器の年代について牛頭古窯址群の編年を使用する（大野城市2012）。

III A 期	6世紀中頃
III B 期	6世紀後半
IV A 期	6世紀末～7世紀初頭
IV B 期	7世紀前半
V 期	7世紀中頃
VI 期	7世紀後半
VII A 期	8世紀前半
VII B 期	8世紀後半
VIII 期	8世紀末～9世紀前半

【参考文献】

大野城市2012「史跡牛頭須恵器窯跡保存管理計画書」大野城市教育委員会

## 第IV章 I区

I区は、南西の調査区で調査面積は最も広い1,193㎡である。調査区西側は建物の基礎によって著しく削平を受けている。I区の地表面は西側でおよそ8.15m、東側でおよそ8.70mをはかり、西側がおよそ60cm低くなっている。

### SD01（図3・4・5、図版3）

まず古墳時代から古代にかけての道路状遺構にあたる可能性があることから並列溝の確認を行った。その結果西端で南北方向の溝SD01が検出された。延長部の状況を知る目的で調査区南西隅に逆L字のトレンチを設定した。SD01の延長部は南西方向に傾斜しているためトレンチの北側約1.0mで途絶えていることを確認した。さらに西側へ拡張したトレンチによって西側の溝や道路面は確認されなかった。SD01は、北側の48次調査で検出された並列溝につながる可能性がある。また鹿児島本線の南約50mで検出された溝（111次調査）はSD01の対になる西側の並列溝となる可能性がある。側溝の底のレベルは那珂中央公園の114次調査（1082集）の4001で8.9～9.2m、4002で8.8～9.3

m、48次調査(455集)で8.0m前後、179次調査のSD01で約7.80m、111次調査(年報20)で8.05mをはかり、丘陵の中央部から南に向かってゆるやかに傾斜していることがうかがえる。

#### SD01 出土遺物 (図5、図版13)

出土遺物は1がⅦ期の坏蓋と高台部分。2は扁平な自然石をつかった磨石。3が黒曜石製の石鏝。4は長頸壺の頸部以下で、しまった頸部に肩部の沈線の間にはへら状工具による波状の施文がある。上げ底気味の底部を有している。IV B期。

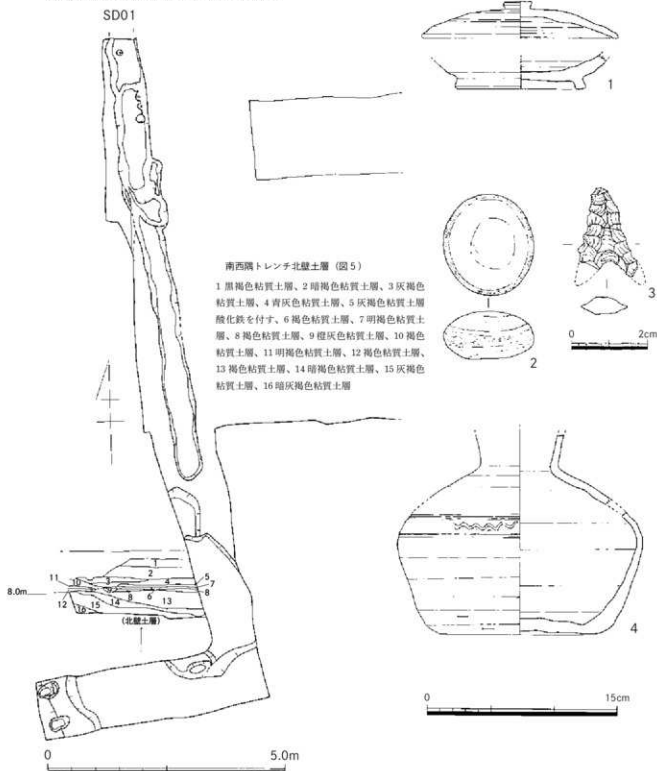


図5 I区 SD01・出土遺物 (S=1/80・1/3・1/1)

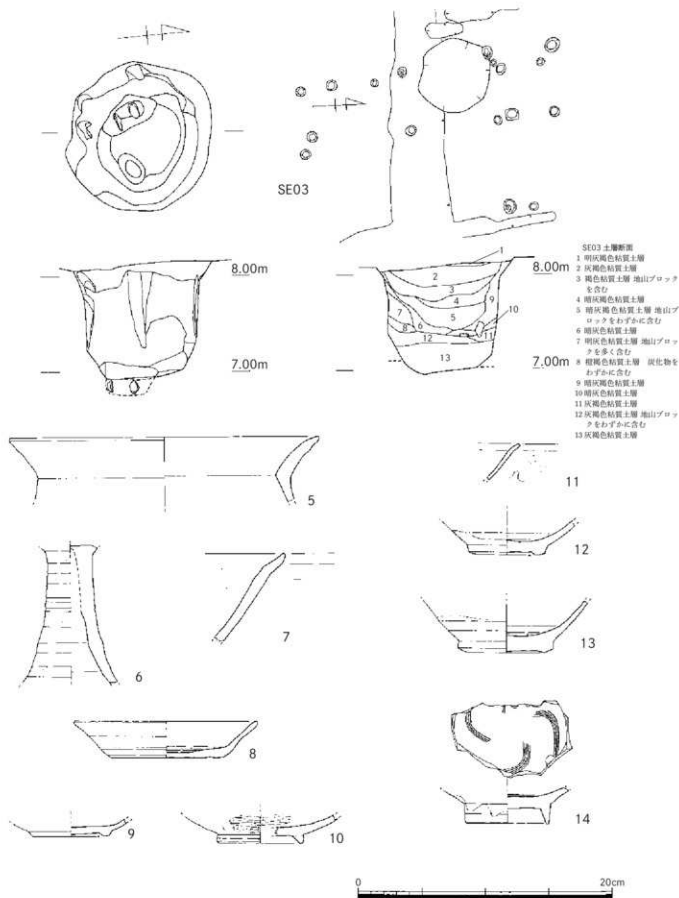


図6 I区 SE03・出土遺物1 (S=1/40・1/3)

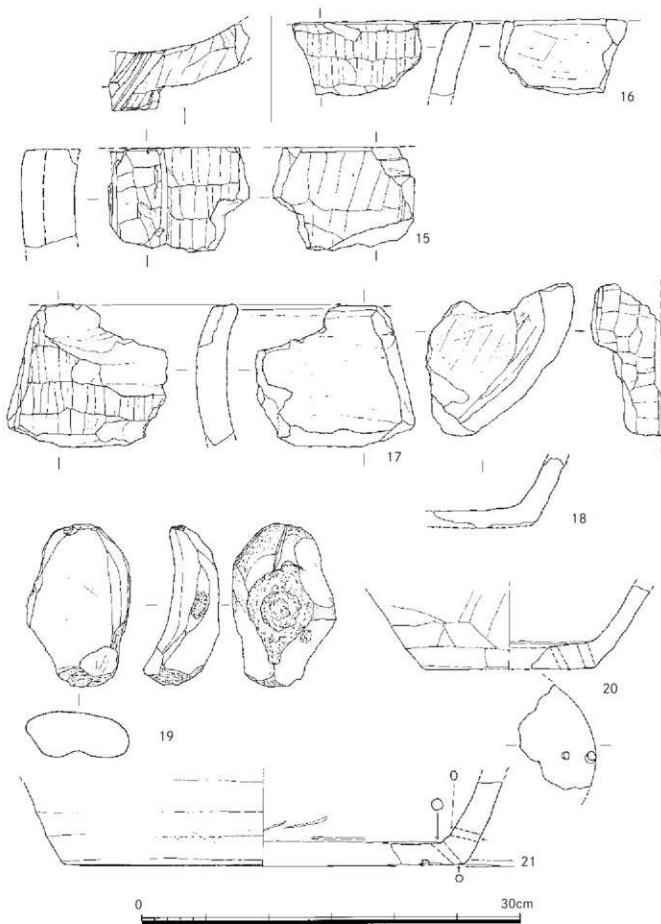


图7 I区 SE03出土遺物2 (S=1/3)

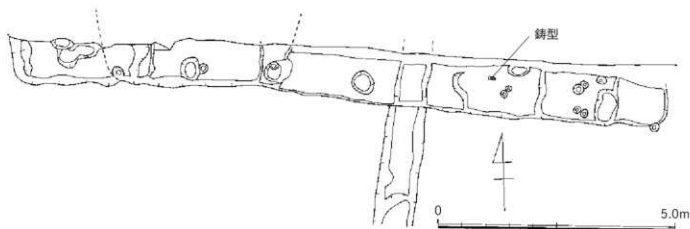
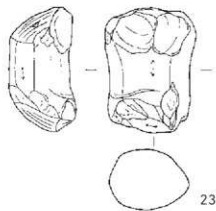
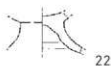


図8 I区 SK04実測図 (S=1/80)

SE03 (図6・7、図版7)

I区西側で検出された素掘りの井戸である。径は上面で1.5～1.6mほどで、深さ約1.4mで底部に至る。底部から20cmほどを境に鳥栖ロームと八女ロームの境となる。遺棄後、底から30cmほど自然堆積によって埋まった後に埋め戻されている。

5は土師器の壺口縁部。6は須恵器高杯の脚部。IV A期。7は瓦質土器の鍋。8はへら切底の土師皿。9・10は瓦器椀。陶磁器では関清義窯(福建省)産の11世紀後半から12世紀前半の標識資料である白磁IV類の碗12・13のほか同12世紀中頃から後半に比定される白磁V類の碗11・14が検出された。このほか滑石製石鍋の破片15～18、20・21が含まれていたが接合する資料はなかった。19の石製品は砥石や叩き石に使用されたものである。



SK04 (図8・9・10、巻頭図版5、図版8)

I区西北で検出された東西にのびる溝状の浅い土坑、古代の溝SD02を切り、西側の土坑によって切られる。青銅器鑄型が出土した。須恵器の低脚の高杯22と砥石23を伴う。

SK04出土の青銅器鑄型 (図10、巻頭図版5)

24は現存長16cm、幅6.8cmの長方体の鑄型の断片である。両面范でA面に青銅武器の鋒部から穂の先端部、B面に銅剣の節帯の突起部から関部、茎部が彫られている。B面の茎部に沿って湯入れによる黒変がみられる。石材は同定を行っていないが、石英長石斑岩とされるものと同くべ色調が暗く、破断面に鉍物の微細粒も観察できない(以下33頁へ)。

図9 I区 SK04出土遺物 (1/3)



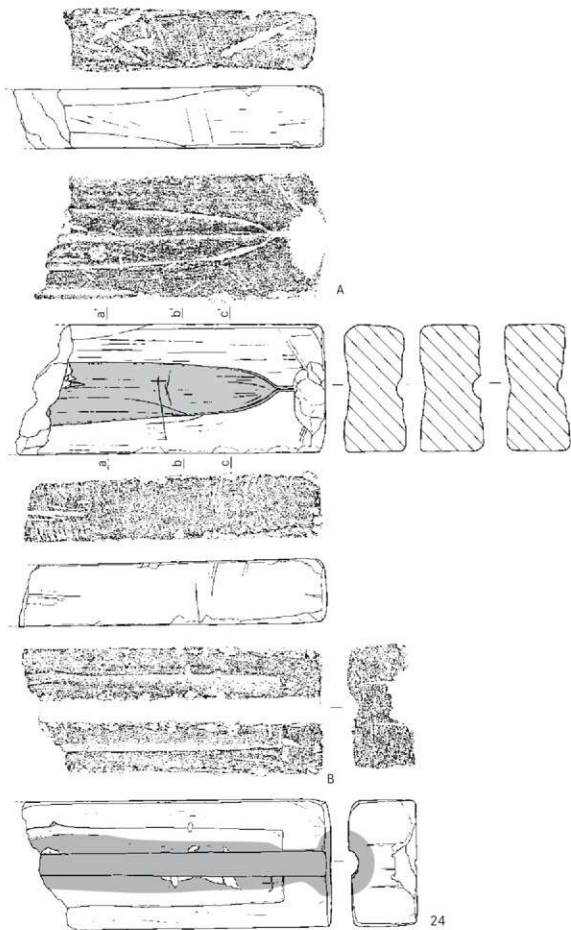


图 10 I 区 SK04 出土铸型 (S=1/2)

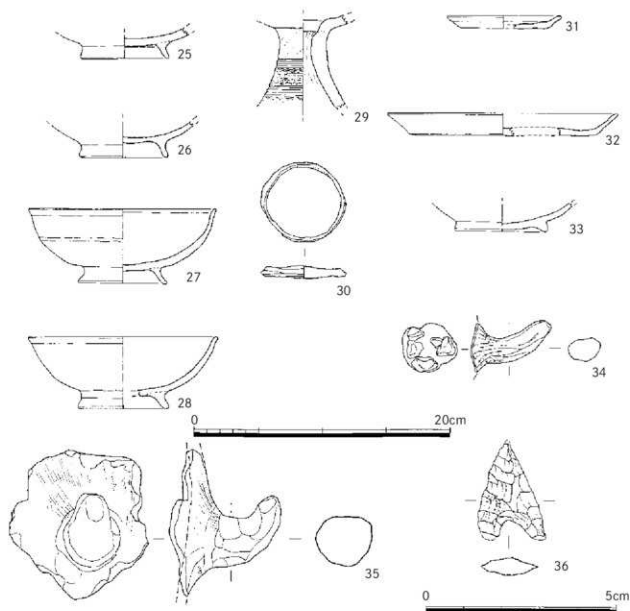


図 11 I 区 SX20 出土遺物 (S=1/3・1/1)

**SX20 (図 11)**

SX20 は I 区南西部で検出された東西 17 m 南北 9 m の窪地である。標高は落際で 8.1 m、南端の低い箇所では 7.6 m 前後をはかる。117 次調査で検出された苑池状遺構と関連する可能性がある。またこれによって SD01 の南延長部が途絶えたのは 10～11 世紀頃の開削が要因となっている可能性がたかまった。

出土遺物は、25 は土師器碗。26 は内黒の土師器碗。27・28 は黄白色を呈する土師器碗。29 は下部に細かい櫛描波状文をもつ須恵器の高杯、Ⅲ B 期。30 は土師器碗の底部。31 は土師皿。32 の盤は褐色を呈する。33 は内黒の土師器碗。34 は土師器の把手部で楕円形の断面をもつ。35 は土師器の把手部で断面は円形を呈する。このほか出土遺物の多くは細片で占められている。36 は石鏃で石材はサヌカイトか。

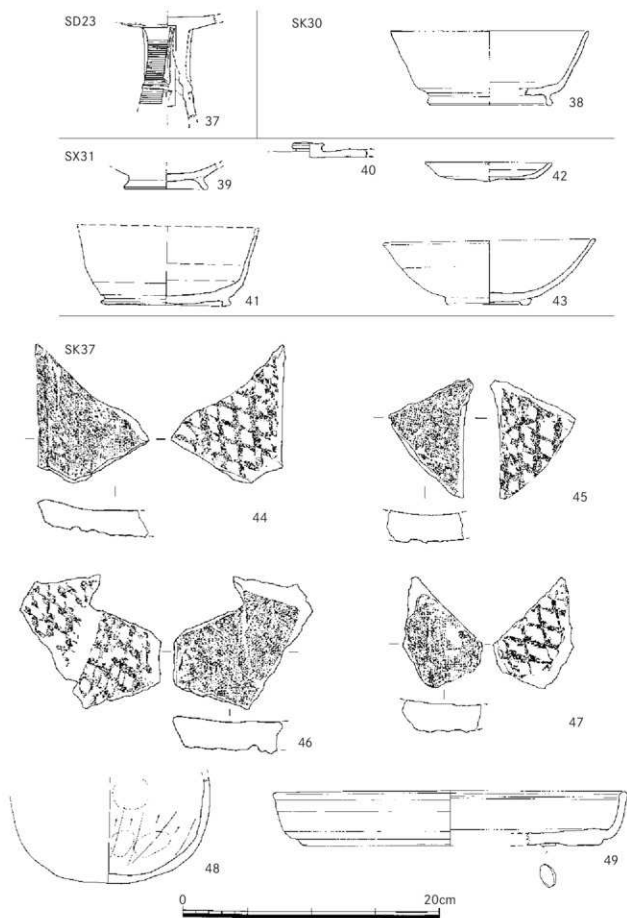


图 12 I 区 SP23·30、SX31、SK37 出土遺物 (S=1/3)

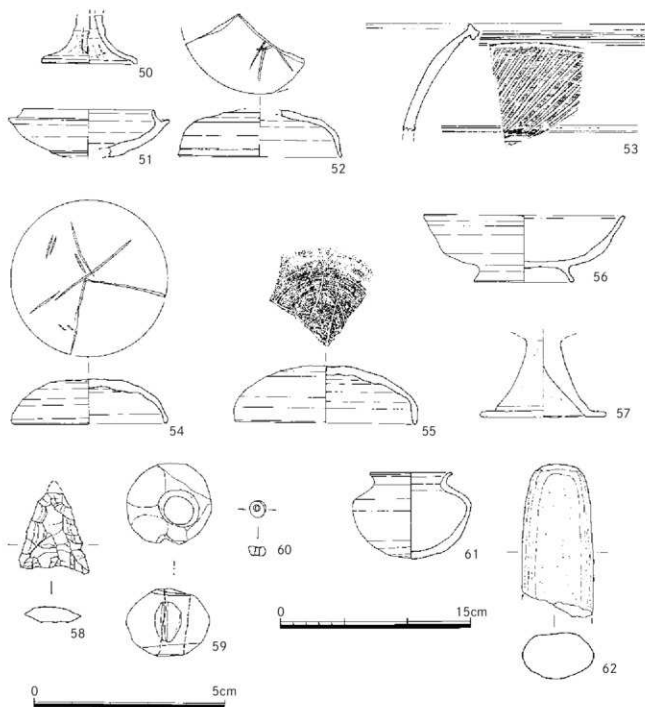


図13 I区 柱穴及び検出面出土遺物 (S=1/3・1/1)

SD23・SK30・SX31、SK37 出土遺物 (図12)

SD23 37は須恵器高坏の脚柱部。透かしは斜方向の切れ込みとなっている。

SK30 38は高台を有する蓋环。

SX31 池状の窪みにともなう遺物。39は黒色土器の高台から底部。40は蓋环のつまみ部分。41は土師器の高台付坏。42はへら切底の土師皿。43は瓦器椀。

SK37 SK37はSD04を切る土坑である。44～47は暗灰色を呈する平瓦。内面は布目痕がみられる。同様の格子目は、三宅庵寺出土の平瓦と近い(50・826・827集)。48は土師器の甕の胴部下半。49は須恵器の盤で、底部に豆粒状の粘土片を付している。

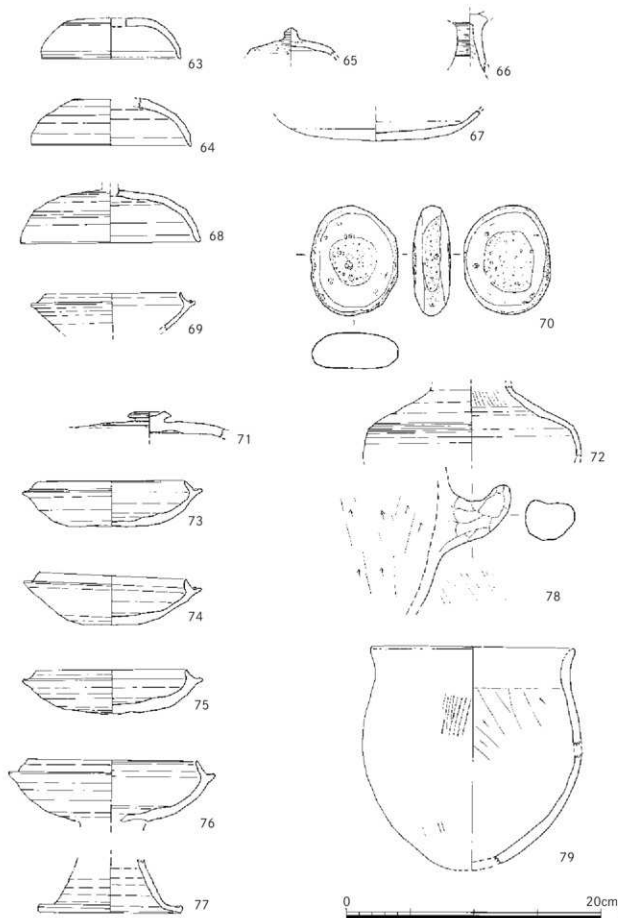


图 14 I 区 SC58·59 出土遺物 (S=1/3)

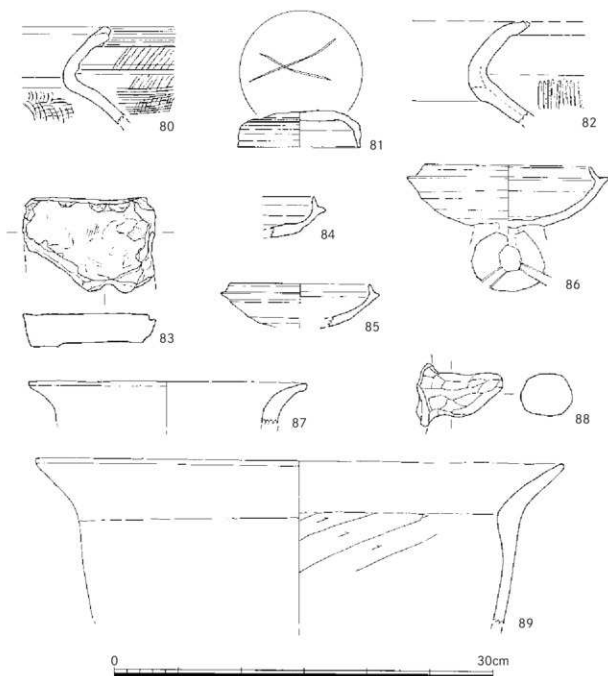


図 15 I区 SK67・SX70・SC75 出土遺物 (S=1/3)

I区柱穴及び検出面 (図 13)

50 は小型高環の脚部である。51 の蓋環は褐色を呈する。52 は蓋環の蓋。上部にヘラ記号がある。53 は須恵器の甕。那珂 114 次調査や月ノ浦 I 号窯跡・小田浦 28 地点(大野城市)で出土している。IVB 期。54 は蓋環の蓋。上部にヘラ記号をもつ。55 は蓋環の蓋。上部に三叉状のヘラ記号がある。56 は高台付の環。内面は黒色を呈する。57 は土師器高環の脚部。明黄灰色を呈する。58 は石織で石材は安山岩か。59 は土玉。暗褐色を呈する。60 は滑石製の白玉。61 は表採資料の須恵器小壺。62 は石斧の基部。

## I 区 SC58・59 出土遺物 (図 14)

SC58・59 は I 区東部の住居跡にともなう遺物である。

SC58 63・64 は蓋環。65 は乳状のつまみをもつ環蓋で、基部が細くなる。66 は小型高環の脚柱部。

67 は土師器皿の底部。褐色を呈している。68・69 は蓋環。70 は扁平な石材を用いた磨石。

SC59 71 は蓋環のつまみ部分。上部のくぼみが顕著である。72 は須恵器の長頸壺の肩部である。

73・74・75 は蓋環。74 は赤焼きの須恵器。76 は高環の受部。77 は高環の脚裾。外面に自然釉がかかる。78 は土師器甕の把手部分の破片。断面は上部がわずかにくぼむ。79 は土師器の甕。被熱の痕が著しい。

## I 区 SK60・SK67・SX70・SC75 出土遺物 (図 15)

SK60 80 は須恵器広口甕、口縁部に左下がりの木口による施文をくわえる。淡黄灰色を呈する。

81 は蓋環、上部にへら記号がみられる。

SK67 82 は須恵器広口甕の口縁部。84・85 は蓋環で、86 は高環の受部から脚の接合部である。

SX70 83 は砂岩製の砥石破片。剥離が著しい。

SC75 87 は土師器甕の口縁部。88 は土師器甕の把手部。89 は大型の土師器甕の口縁部である。

## SB48 (図 16)

I 区東側で検出された東西 6.3m、南北 5.2m の掘立柱建物で西側に 3 間の廂をもつ。柱穴の底までは約 30cmをはかる。

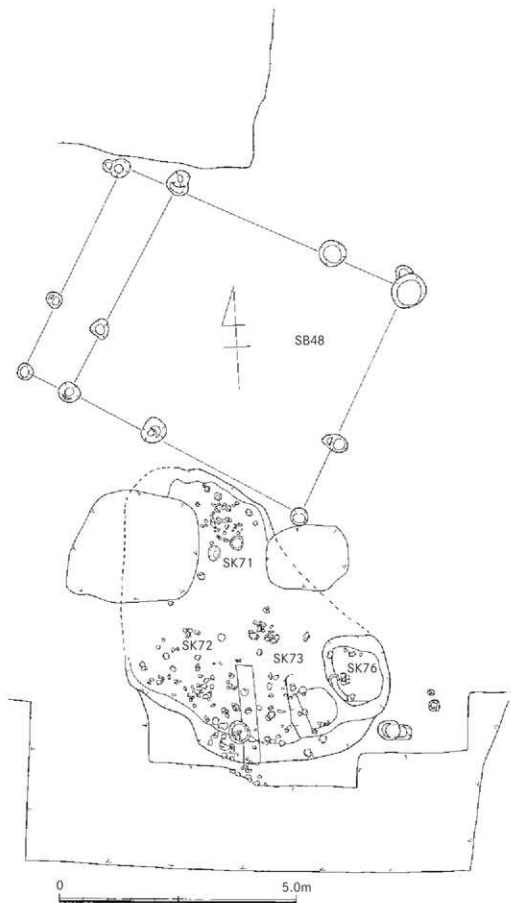


图 16 I区 SB48、SK71·72·73·76实测图 (S=1/80)



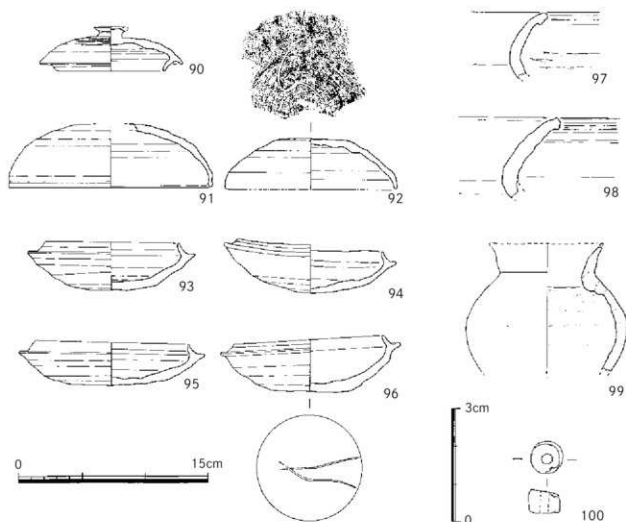


図 17 I 区 SK71 出土遺物 (S=1/3・1/1)

**廃棄土坑 SK71・72・73・76** (図 16～24、巻頭図版 4、図版 9～15)

古代の土器や瓦類の分布が集中する箇所が I 区南東部で確認された。当初、土坑として個別に出土状況を記録した。調査区を南東部に拡張したところ、東西 5 m 南北 7 m の楕円形プランの範囲に出土域が広がることが確認された。検出面の標高は、上部で 8.7 m、下部で 8.2 m 程度。本来はひとつの廃棄土坑であった可能性がたかいが、土器の一括性を示すため当初の遺構番号を用いて説明する。

**SK71** (図 16・17)

廃棄土坑の北西に位置する。須恵器は IV A 期～IV B 期を主体とする。

90 は高台付環の蓋部。つまみは円盤形で頂部がくぼむ。IV B 期か。91～96 は蓋環。91・95・96 は淡灰色。93 は淡青灰色。94 は自然釉を付す。92 と 96 にはヘラ記号が加えられている。97・98 は広口甕の口縁部。99 は土師器の壺の頸部から胴部にかけての部位である。胎土に褐色粒子を多く含む。100 は滑石製の白玉。

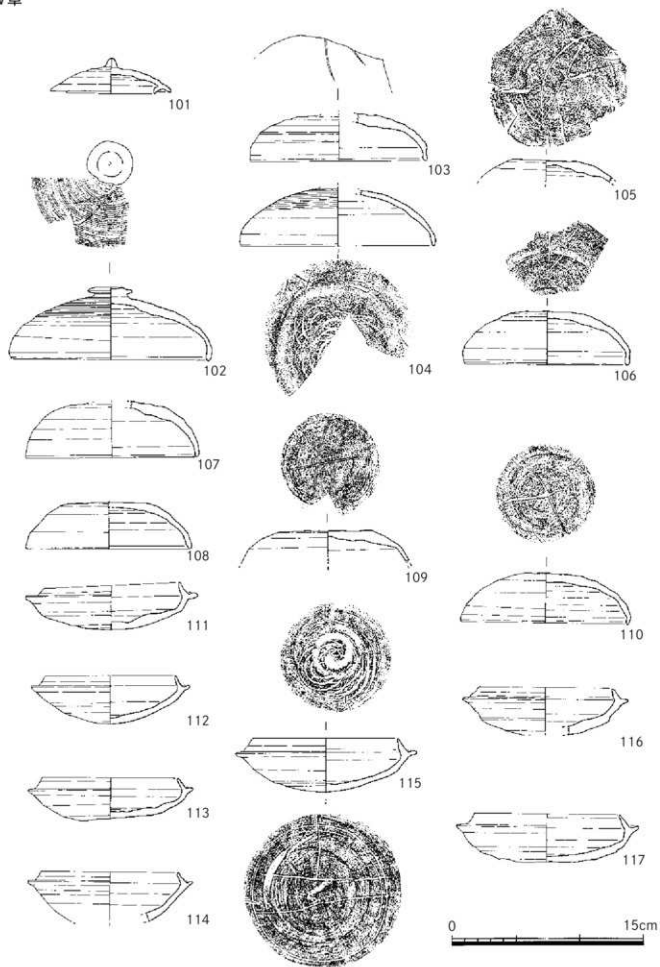


图 18 I 区 SK72 出土遺物 1 (S=1/3)



图 19 I 区 SK72 出土遗物 2 (S=1/3)

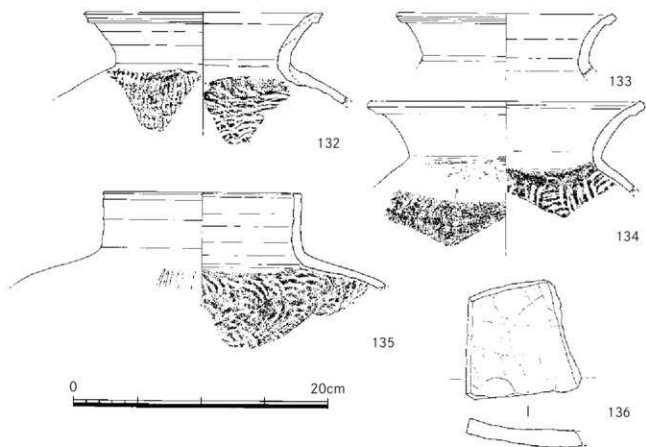


図20 I区SK72出土遺物3 (S=1/3)

SK72 (図16・18・20)

廃棄土坑の南西に位置する。土層ベルトを隔ててSK73と接する。須恵器はIV A期～IV B期を主体とする。

101は蓋坯の蓋である。頂部に乳状のつまみをもつ。102・104は有蓋高坯の蓋部である。頂部付近にカキ目がみられる。104の内面には同心円状の当て具痕がみられる。102のつまみの下にはへら記号がみられる。103～117は蓋坯類である。103、105、106、109、113、115にはへら記号がみられる。115の内面には同心円状の当て具痕がみられる。

118は注口土器の腹で、肩部に調整具の木口による押圧文が連続する。漏斗状の上部の段がなくなったIV B段階にあたる。119は角状の突起をもつ椀、黒灰色を呈し硬質である。120はもともと高台付椀である。口縁下と下部に轆轤成形時の沈線文がみられる。121・122は高坯の坏部。123は高台付椀の高台部の破片である。124は堤瓶、瓶には成形時のカキ目があり頸部下にへら記号を加えている。

125は高坯の受部、126は有蓋高坯の受部から脚部である。脚部には二段にわたって縦方向の透かしがある。127～131は高坯の破片である。128は橙色を呈する赤焼きの須恵器。

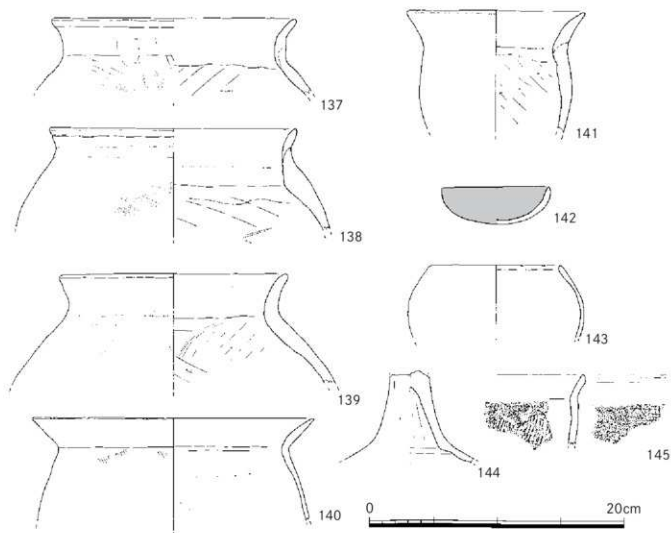


図 21 I 区 SK72 出土遺物 4 (S=1/3)

132～134 は広口甕の口縁部。135 は直口の甕の口縁部である。136 は初期の平瓦の破片である。灰白色の胎土は SC74 出土の初期瓦と通有のものである。

137～140 は土師器の甕である。142 は土師質の椀。内外に赤色顔料を塗布する。143 は土師器の無頸壺。被熱の痕跡がある。144 は土師器高環の脚裾部。145 は土師質の甕で器表に格子状の叩き痕跡がみられる。

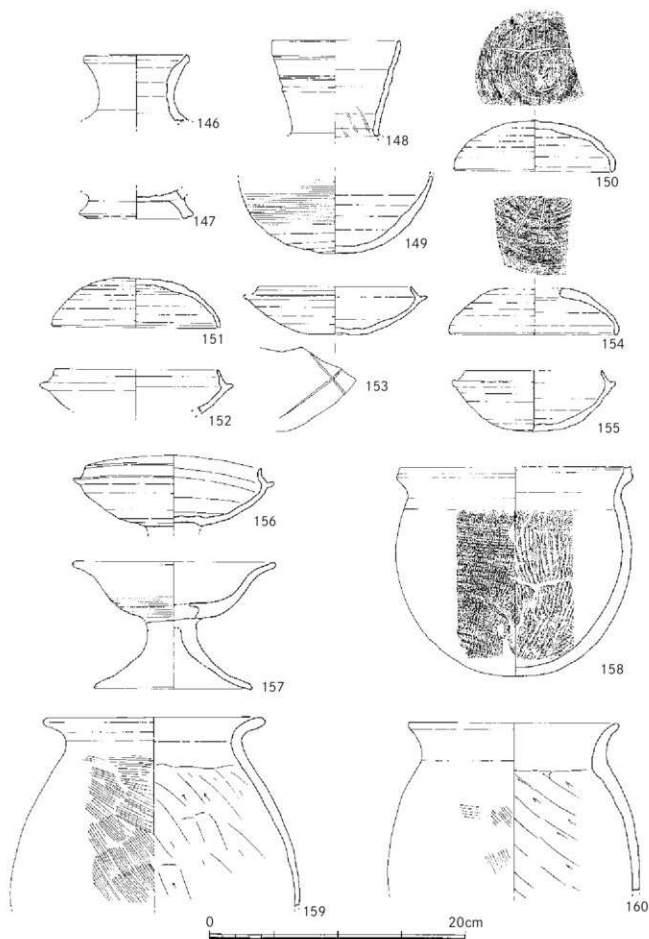


图 22 I 区 SK73 出土遗物 1 (S=1/3)

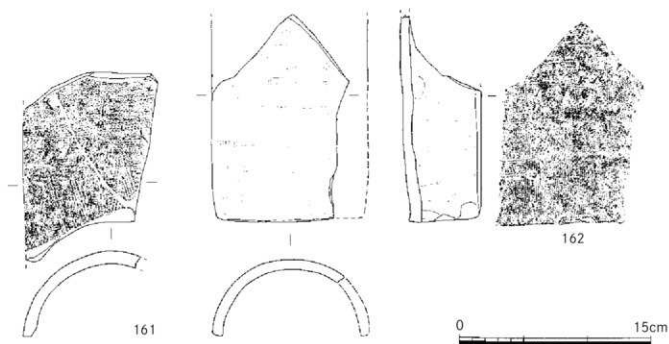


図 23 I 区 SK73 出土遺物 2 (S=1/3)

廃棄土坑の南東に位置する。土層ベルトを隔てて SK72 と接する。須恵器は IV A 期～IV B 期を主体とする。

146 は堤瓶などの壺の口縁部。暗灰色で堅緻。147 は椀の高台部か。148 は長頸壺の口縁部。149 は壺の胴部か。150～155 は蓋環。150、153、154 にはヘラ記号がみられる。156 と 157 は高環。157 の焼成は土師質だが、受部の下にはカキ目がみられる。脚部の接合部には回転台による成形の痕跡がみられる。158 は器表に格子状の叩き痕跡があり、内面には当て具痕がみられる。製塩土器の類か。159・160 は土師器の甕である。161・162 は初期瓦の破片。161 は黄灰色で外面に叩き→調整具によるナデ。162 は青灰色で外面に叩き→調整具によるナデの痕跡がみられる。両者とも内面に輪積痕跡がみられる。

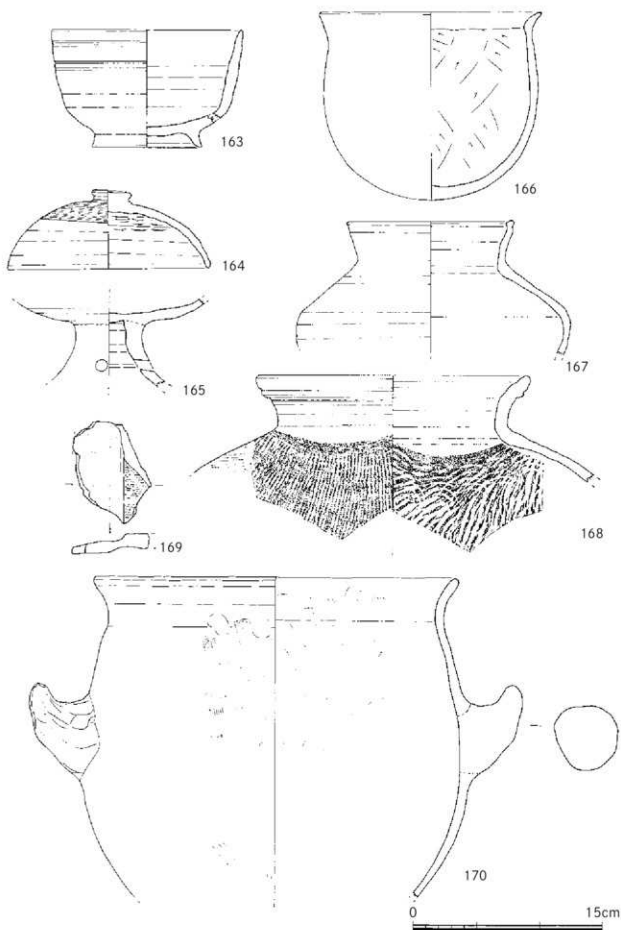


图 24 I区SK76出土遗物 (S=1/3)



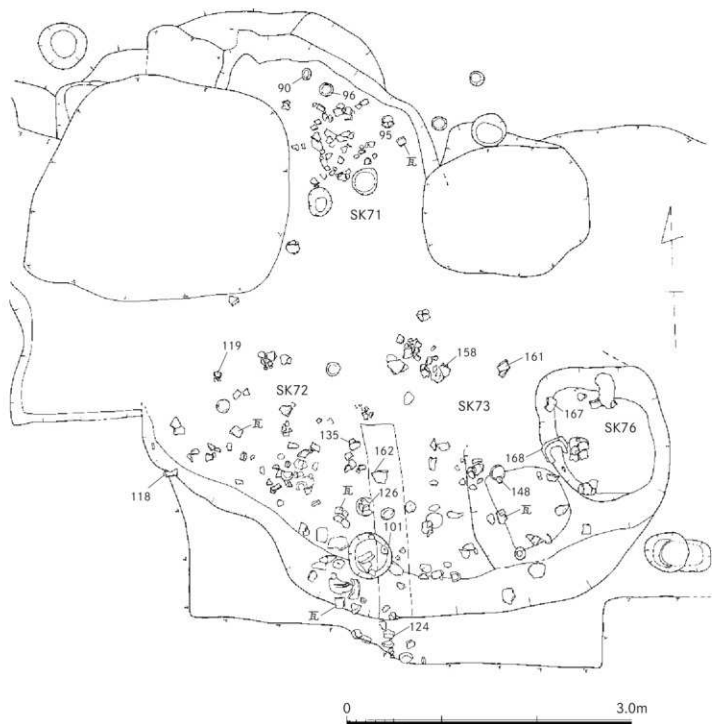


图 16-2 I 区 SK71·72·73·76 实测图 (S=1/40)

**SK76** (図 24)

SK73 の東で検出された不整円形の土坑である。163・164 は境界の土層ベルト内で検出された。以下 170 までは SK76 で出土した。

163 は灰白色で軟質。型式は須恵質の高台付椀と同様だが焼成不良。164 は有蓋高環の蓋、頂部にカキ目が施されている。外面は黄灰色で内面はやや褐色をおびている。165 は高環や台付壺などの脚部。暗灰色で堅緻。166 は土師器の甕。内面の上半部は被熱により黒変する。167 は壺の上部である。口縁端部を内側になでて肥厚させる。脚台が付する可能性がある。暗黄灰色を呈する。

168 は広口甕の口縁部。外面に左下がりの叩きを加え、内面に同心円の当て具痕跡がある。叩き成形の後、なでを加えている。黄灰色を呈する。169 は初期瓦の先端部である。淡灰色を呈し、接合部には浅い段が形成されている。170 は把手付きの甕である。把手の断面は円形に近い。

**SD43** (図 25、図版 18)

SC74 を切る逆 L 字状の溝状遺構。深さは 20cm 程度である。覆土内から遺物は出土していない。区画内に 60～100cm の間隔で対峙する柱痕が確認された。柱の掘り方は径約 15～20cm ほどで、中心部に径 10cm 程度の柱痕跡が確認された。一般的な柱としては径が小さく、横長の板を固定するための杭痕跡とみられる。古代から中世にかけての建物の地業とみられる。

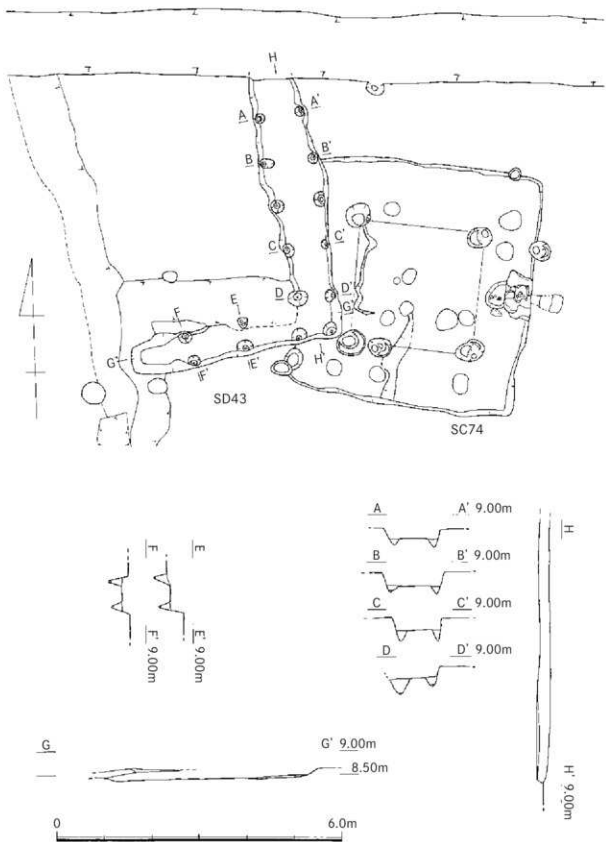


图 25 I 区 SD43·SC74 实测图 (S=1/80)

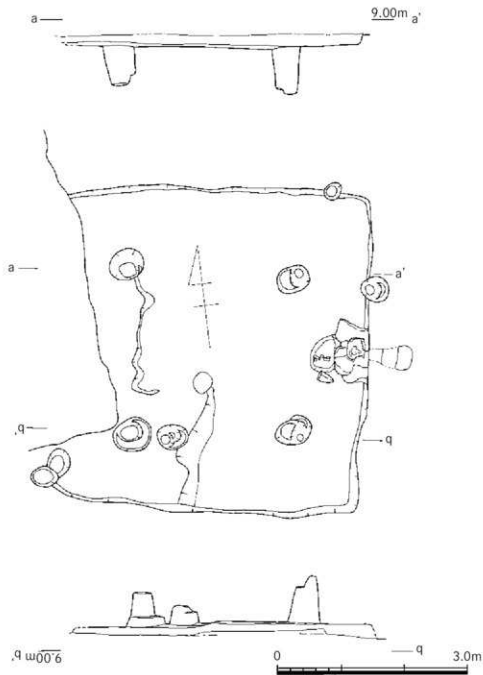


図 26 I区 SC74 実測図 (S=1/60)

SC74 (図 25～28、図版 16・17)

4本柱の支柱をもつ住居跡で南北5.2m、東西5.1mほどのプランを持つ。柱穴の深さは55～70cmほどで、柱間は2.6～2.7mをはかる。東壁の中央に造りつけの竈を設置している。

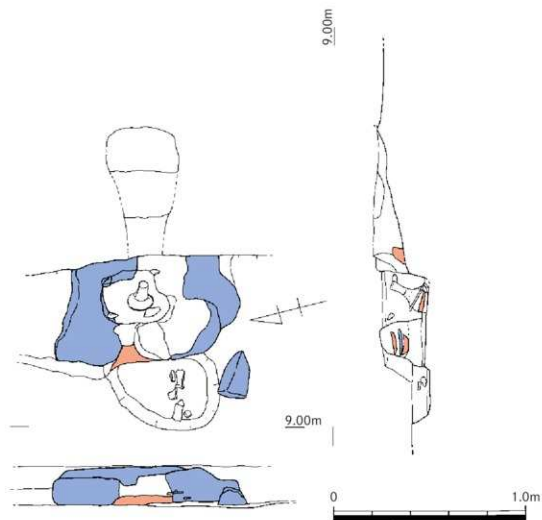


図 27 I 区 SC74 竈実測図 (S=1/20)

**SC74 竈実測図** (図 27、図版 16・17)

造りつけの竈は幅 1.0m、奥行き 0.5m ほどで東側に煙道の煙出し部を遺存する。竈中央には土師器の丸底椀を伏せ、その上に赤焼き須恵器の脚部を置く。竈正面の左袖部で半折した石庖丁 176 が検出された。

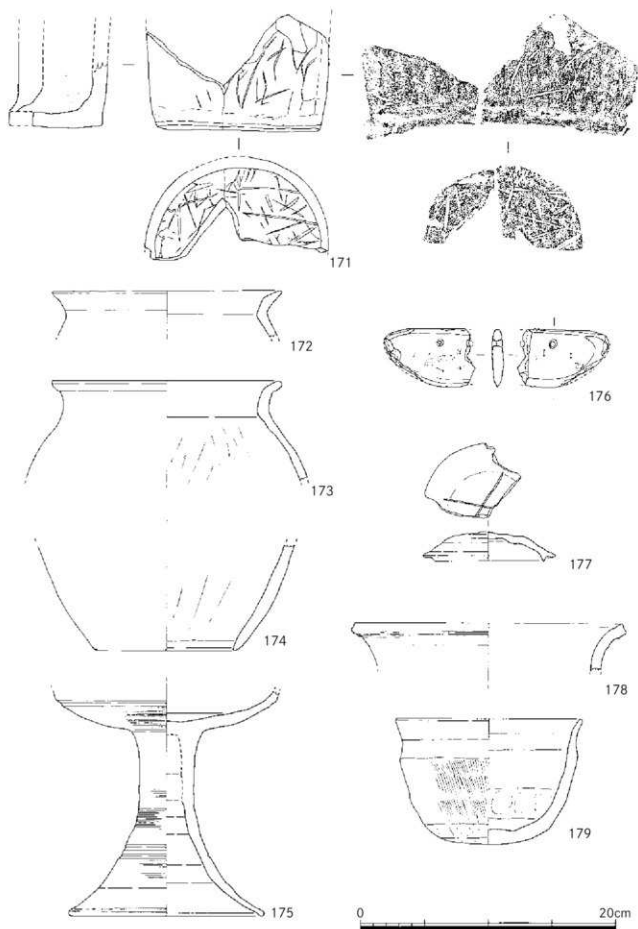


图 28 I 区 SC74 出土遗物 (S=1/3)

## SC74 出土遺物 (図 28)

171 は初期瓦の瓦当部分である。二個体に分かれており、SK60 で出土した破片と接合した。瓦当部の径は 13.0cm。白灰色の胎土で、瓦当面にはへら状の工具による線刻が観察される。

172・173 は土師器の甕。174 は甕の裾部で被熱の痕がみられる。175 の高坏の裾部は椀を伏せた上に置かれていた。橙色を呈する。IV B 期に比定される。

176 は甕の上面で検出された石庖丁。青灰色の変成岩質の石材で孔の部分で折損している。両面穿孔。竈祭祀に供されたとみられる。

177 は蓋环。上面にへら記号が施されている。178 は広口甕の口縁部。青灰色で堅緻。179 は土師器の丸底椀。厚みをおびている。

## (10 頁から)

A 面・B 面とも彫りが浅く、古段階の矛の樋は研ぎ出しによるものであるため想定しがたい。戈では樋の先端が分かれる型式である可能性はあるが、鋒部から樋の先端までが 10cm ほどになる類例は思いあたらないなどの理由から A 面と B 面が一体化した全長 40.3cm ほどの銅剣の鑄型となると推定した (図 61)。

A 面は鋒部先端からガス抜けのための細い溝がのびている。鋒部から樋の手前まで明瞭な鑄が通っている。10cm 付近で樋の一方が観察できる。樋のもう片方は削平のため痕跡を留めていない。刃部の幅は樋の部分で 3.3cm、断面は先端付近の c-c' で 2mm、b-b'、a-a' で 3mm ほどの厚みである。鋒部から基部に向かって被熱による黒変がみられる。

B 面は茎部で 4mm ほど、関部から節帯部分の刃部の幅は 3.8～4.1mm で刃部の厚みは 1mm ほどである。以上から扁平で細身の銅剣が想定される。脊の両側に被熱による黒変がみられ、鑄造時のものとみられる剥離面がある。関の一方にある筋状のくぼみは後世の疵である。

## 第V章 II区

II区は、I区の東に位置する調査区で調査面積は716㎡である。建物の基礎によって削平を受けていたが6世紀代の住居跡・掘立柱建物の分布状況を確認することができた。II区の地表面は北西でおよそ8.70m、東南でおよそ8.40mをはかり、東に向かってゆるやかに傾斜している。調査区を横断する溝SD05については次章にまとめた。

方形プランの竪穴住居跡は4軒で最も遺存状況が良好なSC11では貼り床が確認された。鳥形土製品が出土したSC22は削平のため竪穴住居跡のプランの一部をかくらうじて残すだけである。

### SE06 (図44、図版28)

II区の北西で検出された素掘りの井戸。地表から1.7mほどで底になる。出土遺物は検出されなかった。

### SD07 (図29)

SD07は、II区北東をはしる溝である。この遺構はSC11を切り、SD05に切られており、掘削時期がIV A期に限定される遺構である。深さは10cm程度と浅い。

### SD07 出土遺物 (図30)

1は赤焼き須恵器の蓋環。2は土師器甕の把手部である。断面は横長の楕円を呈する。3は須恵器の甕の口縁部。暗灰色を呈し、堅緻。

### SK08 (図43)

調査区東端にある不整形の土坑。

### SK08 出土遺物 (図30)

4・5・6は蓋環。4の内面に当て具の痕跡がみられる。7は短頸壺。肩部に沈線がみられる。8は土師器の長頸壺。厚みがありやや軟質。9は土師器高杯の脚部である。

### SD09 (図29)

調査区南東で検出された北西にコーナーをもつ溝。

### SD09 出土遺物 (図30)

10は赤焼き須恵器の蓋環。11の初期瓦は、黄灰色を呈し、外面に叩き→ナデ、内面に指押しさえの痕跡がある。

### SK10 (図43)

調査区東端にある不整形の土坑。長軸2.5m、短軸1.8mをはかる。土坑の下層に焼土の堆積がみられる。

### SK10 出土遺物 (図30)

12は須恵器の蓋環。13は蓋環であるが焼成は不良。黄灰色を呈する。14～16は土師器の小型の甕。黄褐色を呈する。



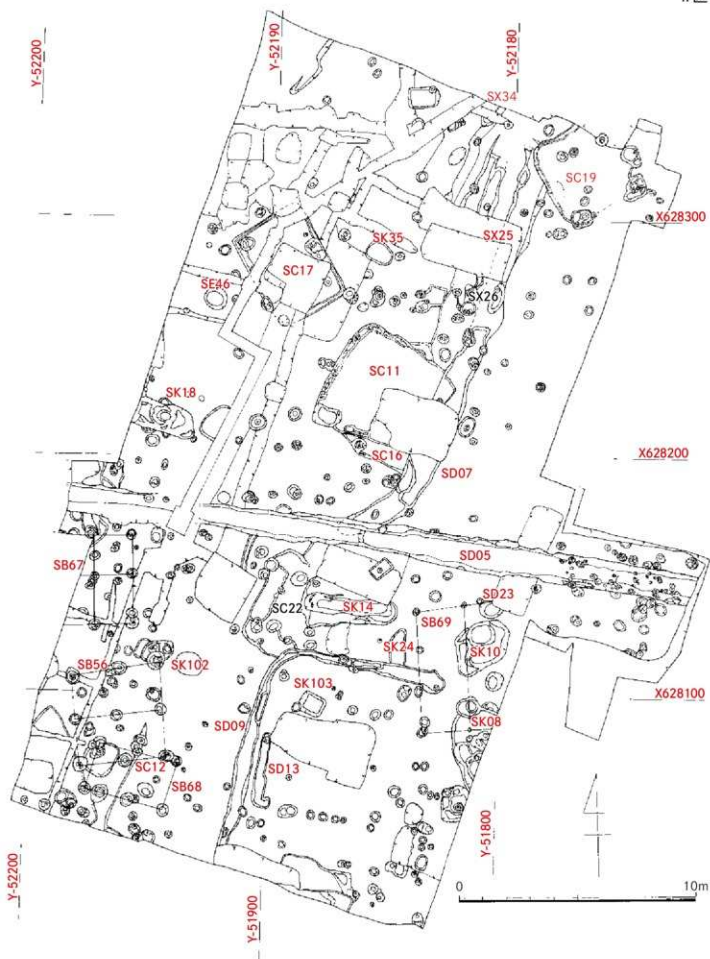


図 29 179次調査II区の遺構配置図 (S=1/160)

SC11( 図 31・34、図版 19～23)

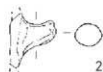
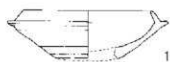
Ⅱ区の中央部で検出された堅穴住居跡。東側は削平を受けているが、一辺 4.8 m 四方の規模と推定される。床面はタタキ状に固められており、約 10cm の厚さの貼床を除去すると一面に広がる掲き棒の痕跡が検出された。貼床を除去した状態で壁は 30～35cm、支柱穴は 4 本で深さは 70cm 程度である。

住居跡の北側で灰白色の粘土塊が集中する箇所が検出された。ここでは支脚が据えられた状態で検出された。また南西隅に長方形プランの屋内土坑、深さ 60cm 程度が確認された。

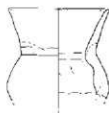
SC11 出土遺物 (図 32・33)

17 は土師器甕の口縁部、橙色。18 は蓋環で中間に明瞭な段を有している。小豆色がかった灰色を呈している。Ⅲ B 期。19 は土師器甕の把手、断面は円形に近い。20 は砥石。暗黄灰色を呈している。21 は土師器甕の口縁部。黄灰色を呈する。22～30 は蓋環。22 は焼け膨れがある。灰色。23 は坏身。外面に自然釉を付す。24 は坏身。暗青灰色を呈している。25 の蓋は頂部にカキ目ののち木口による施文をめぐらす。26 の蓋環は中間の段は不明瞭である。暗青灰色。27 は坏身。やや緑がかった青灰色。28 は土師質の坏蓋。橙色で粗い胎土である。29 は坏蓋。淡黄灰色を呈する。30 は坏身。やや緑がかった青灰色。Ⅲ B からⅣ A 期にあたる。31 は甕の口縁部。淡黄灰色を呈する。32 は土師器甕の上半部。粗い胎土で被熱の痕跡が顕著である。33 は黒曜石製の石鏃。

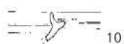
34 は支脚 (図 33)。灰色の粘土塊が集中する箇所ので乾立した状態で検出された。現存長 16cm、幅は 6.5～7.0 で縦方向に面取りがなされている。被熱痕跡が顕著である。



SC07



SC08



SD09



SK10

图 30 II区 SD07、SC08、SD09、SK10 出土遺物 (S=1/3)

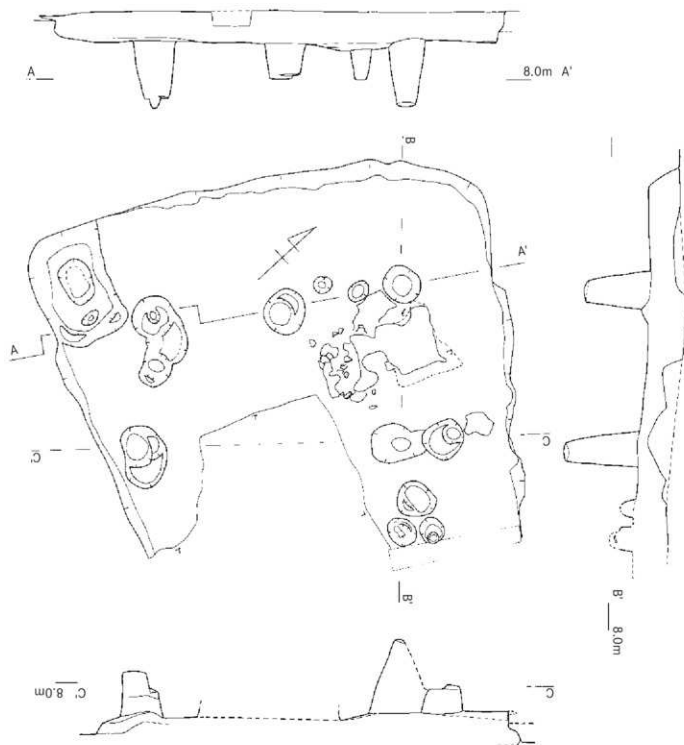


图 31 II区 SC11 实测图 (S=1/40)

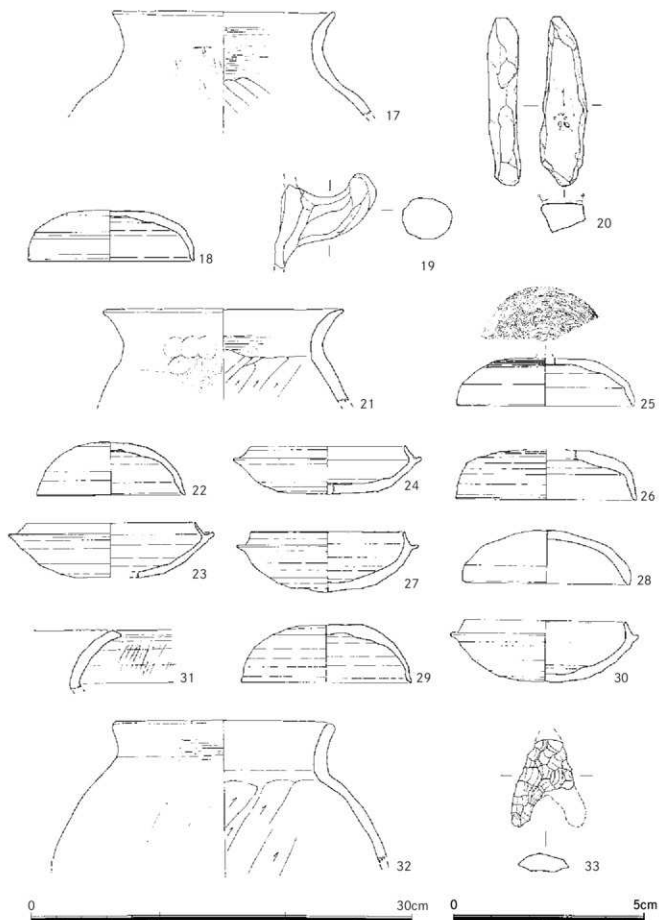


图 32 II区 SC11 出土遺物 1 (S=1/3·1/1)

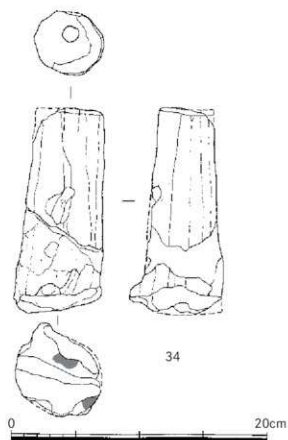


图 33 II区 SC11 出土遗物 2 (S=1/3)

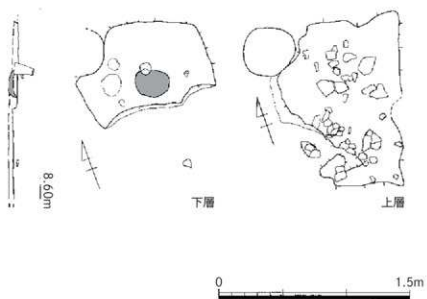


图 34 II区 SC11 竈実測図 (S=1/30)

## II区 SC11 竈跡実測図 (図 34、図版 22・23)

灰白色の粘土塊は東西 1.0 m、南北 1.3 m の範囲に集中していた。34 の支脚は粘土塊を除いたところから立った状態で検出されたことから壁に接しないタイプの竈が築かれていたと推定する。

## SK14 (図 35)

SK14 は II 区の中央部で検出された東西 3.7 m、南北 0.7 m の土坑である。東西方向の長軸の下端は 2.95 m をはかる。遺物はほとんど出土しなかった。

## SK14 出土遺物 (図 36)

35 は蓋環の身。胎土は小豆色を呈する。

## SK15 (図 35)

SK15 は II 区南端で検出された不整形の土坑である。

## SK15 出土遺物 (図 36)

36 は甕の口縁から頸部にかけて。内面に同心円の当て具痕跡があり、胴部外面は叩きの後、カキ目調整を加える。青灰色を呈し、焼成は堅緻。37 は蓋環で表面は褐色をおびた灰色。頂部にヘラ記号がある。38～41 は蓋環。38 は暗青灰色。39 の内面は褐色を呈し、外面は青灰色。底にヘラ記号がある。40 の内面は青灰色で、外面には自然軸を付す。底部にヘラ記号がある。41 の身は青灰色を呈する。42 は高環。坏部の内面に成形時の痕跡をのこす。坏の下部に段をもつ。暗青灰色を呈す。IV B 期。45 は小型の甕。内面に被熱による黒変がみられる。43 は長頸壺の口縁部。厚みがあり、焼成は土師質で暗褐色を呈する。44 は壺の頸部から胴部で、青灰色を呈する。肩部には木口による刺突文がめぐる。

## SK18 (図 44)

SK18 は、II 区中央部西壁にかかる断面 U 字形の深さ 75cm の土坑である。

## SK18 出土遺物 (図 36)

46 は小型の甕。被熱の痕跡が著しい。47・48 は須恵器の蓋環。47 は暗黄灰色を呈する。48 は暗黄灰色を呈する蓋の頂部。ヘラ記号がみられる。49 は土師器甕の口縁部。

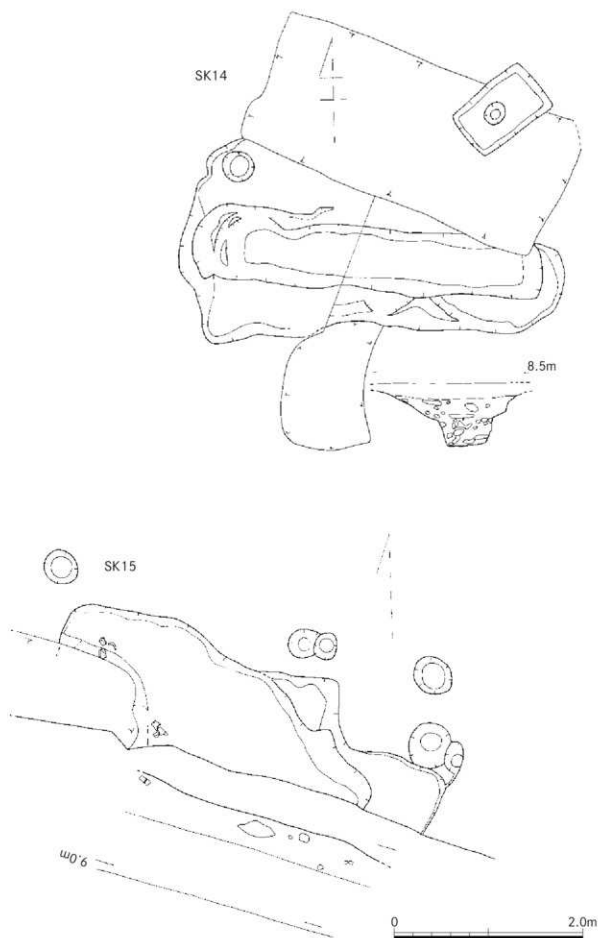


图 35 II区 SK14·15 实测图 (S=1/40)



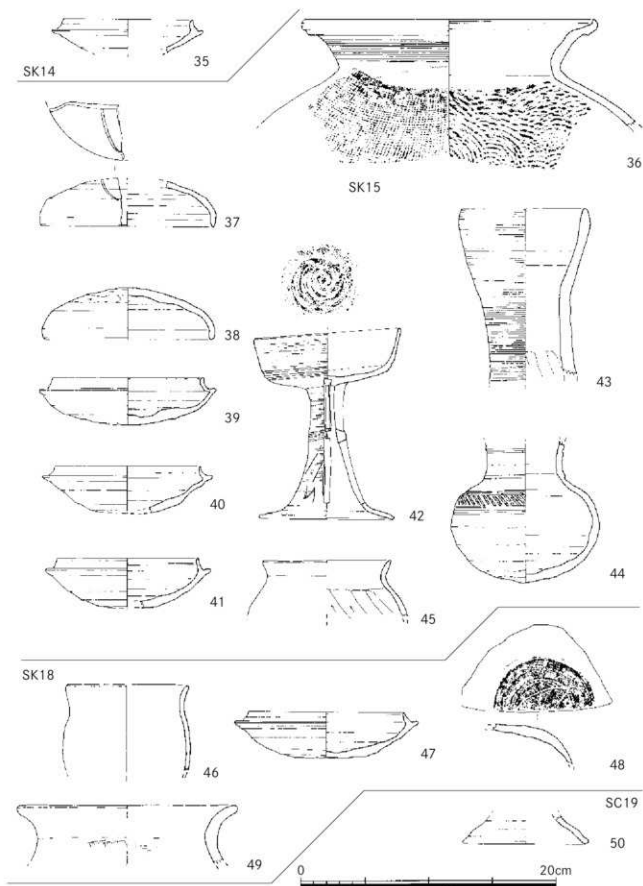


图 36 II区 SK14·15·18、SC19出土遺物 (S=1/3)

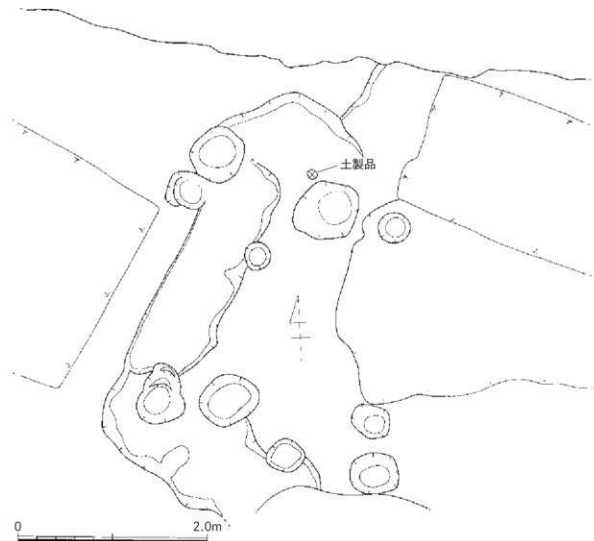


図 37 II区 SC22 実測図 (S=1/40)

#### SC22 (図 37、図版 24・25)

II区中央で住居跡の西側のプランが検出された。SK14 や試掘トレンチによって削平をうけており、遺存状況はよくない。壁は 15cm ほどが確認できたことにとどまる。遺構検出時に鳥形土製品が出土したことから注目された。土器など時期を比定する資料は出土していない。II区では古式土師器は検出されていないこと、北に掘削された SD05 の時期に先行するとみられることから、SC11 は III B 期頃である可能性が高いとみられる。

#### SC22 出土遺物 (図 38、巻頭図版 5)

51 は鳥形土製品。全長 8.8cm、片翼を欠くがもともと 6.0cm ほどの幅と推定される。腹部に剥落した痕跡があることから、近接して出土した柱状の土製品と一体であった可能性がある。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好。

棒状の木製品を挿すことで眼をあらわしている。翼部は上がり、尾部が跳ねる様子について、野鳥の威嚇を目的としたディスプレイ飛翔とする説がある。

#### II区 107・441 検出面出土遺物 (図 39)

52 は移動式竈の焚口部分。53 はガラス小玉。コバルトブルーを呈している。SC19 付近の遺構検出時に出土した。54 は土師器甕の把手部分。褐色を呈し、焼成は良好である。

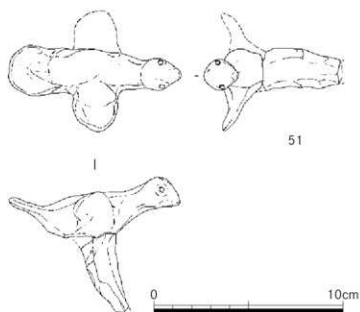
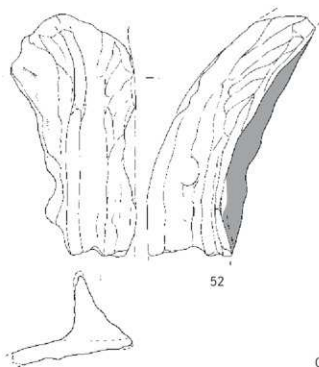


图 38 II区 SC22 出土遺物 (S=1/2)

II区 107



II区 SC19



II区 441

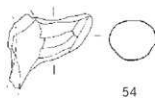


图 39 II区 107・441 検出面出土遺物 (S=1/3・1/1)

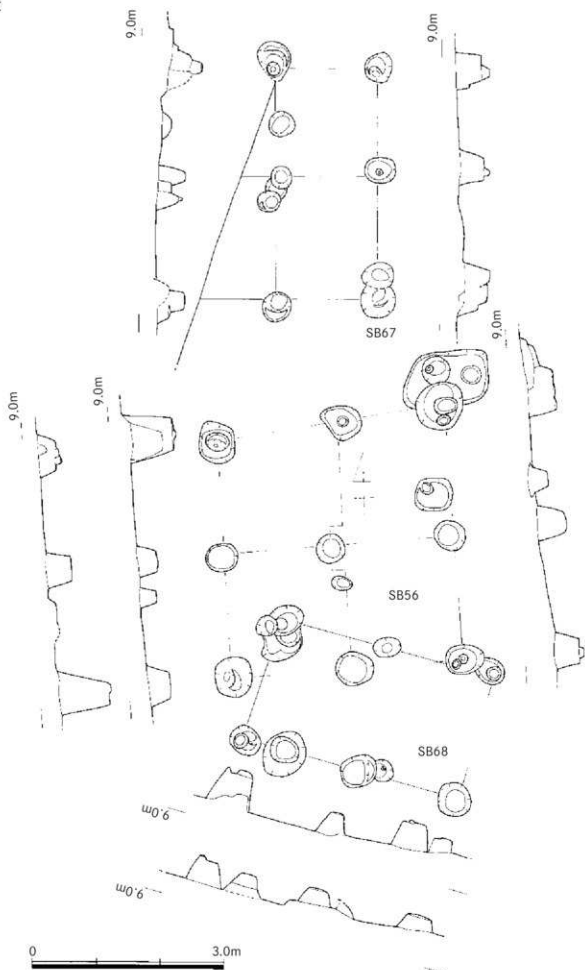


图 40 II区 SB56·67·68 实测图 (S=1/60)

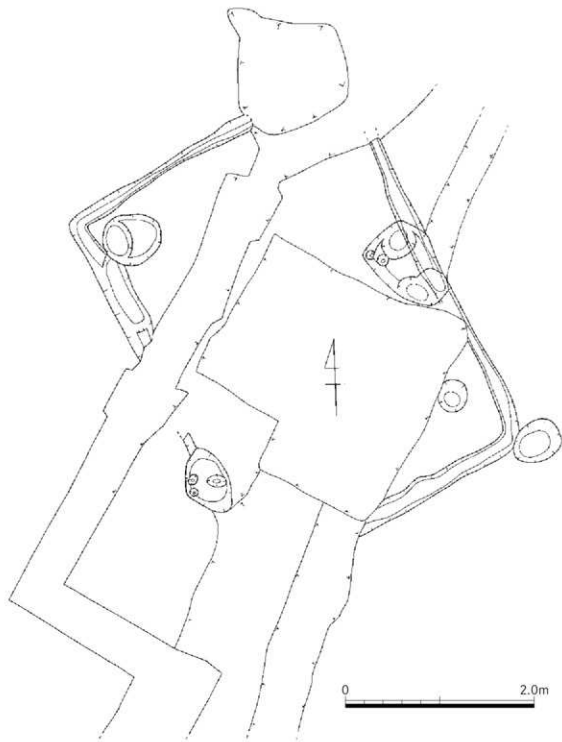


図 41 II区 SC17 実測図 (S=1/40)

**SC17** (図 41、図版 26)

SC17 は、II区北西で検出された南北 4.45 m、東西 3.4 m の長方形プランの竪穴住居跡である。建物の基礎によって削平を受けていたが、壁に沿った溝が確認されたことから住居跡と認定した。主柱穴や竈などは確認できなかった。

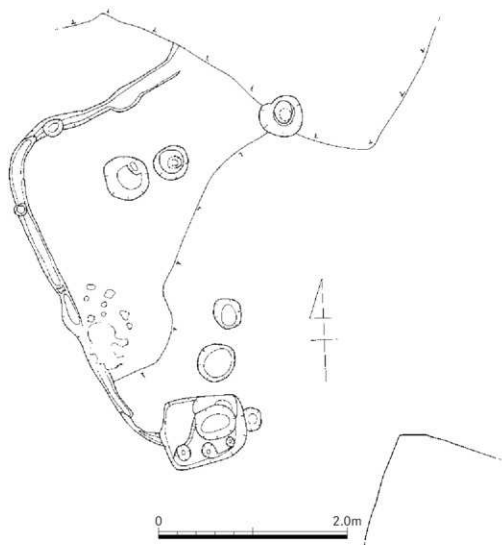


図 42 II区 SC19 実測図 (S=1/40)

**SC19** (図 42、図版 27)

SC19 は II 区北東隅で検出された竪穴住居跡である。一辺 3.5 m 程度の規模で、西壁中央に粘土塊が分布することから、造りつけ竈があった可能性がある。攪乱や削平により遺物の遺存度はひくい。

**SC19 出土遺物** (図 36)

50 は高坏の脚裾あるいは踵の口縁部である。

**SB69 掘立柱建物** (図 43)

SB68 は 2 間 × 1 間の側柱建物。柱穴は円形プランで柱間は桁行 1.7 m、梁行 2.1 m をはかる。

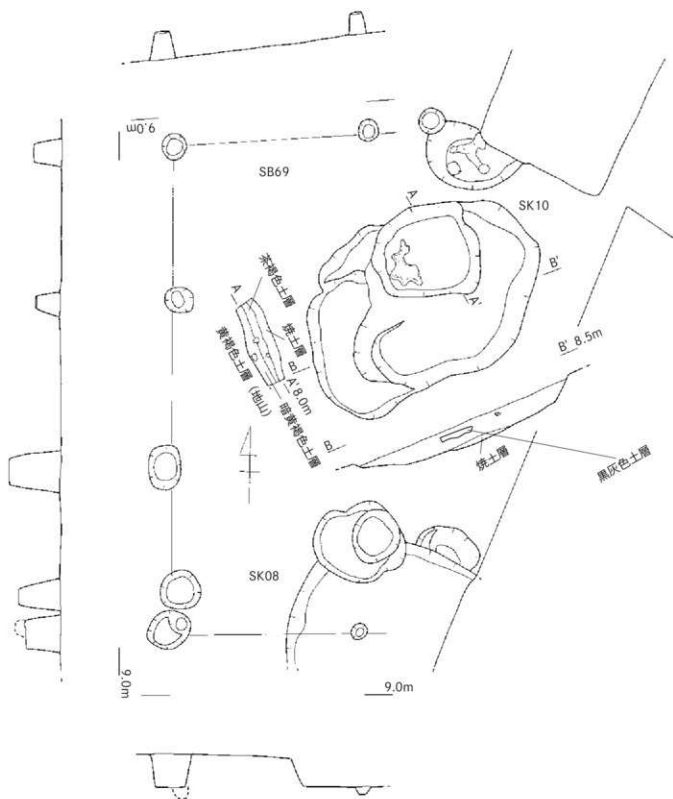


图43 II区 SB69、SK10·08实测图 (S=1/40)

**SB56・67・68 掘立柱建物**（図40、巻頭図版2、図版37）

Ⅱ区南西隅で検出された掘立柱建物は3棟である。

SB56は2間×2間の総柱建物。柱穴は円形プランで柱間は1.8～2.0mをはかる。

SB67は2間×2間以上の総柱建物。柱穴は円形プランで柱間は1.8～2.0mをはかる。調査区西側へ広がる可能性がある。

SB68は2間×1間の側柱建物。柱穴は円形プランで柱間は桁行1.6m、梁行2.1mをはかる。



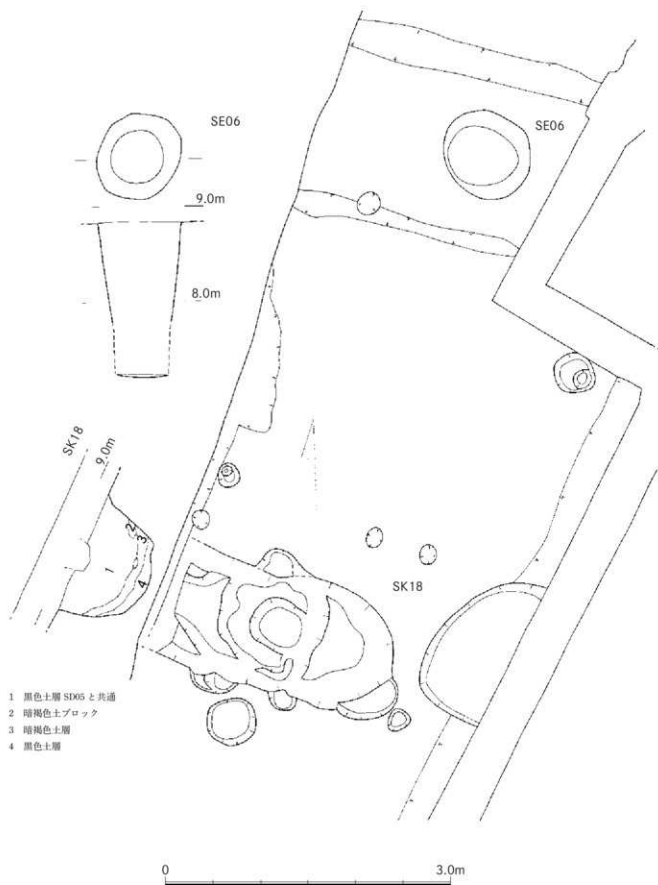


図44 II区 SE06、SK18 実測図 (S=1/40)

第V章

SK102・SK103 (図29・45、図版28)

Ⅱ区のSD05の南で検出された方形プランの土坑である。東への緩斜面に立地する。出土遺物はなく時期比定できない。

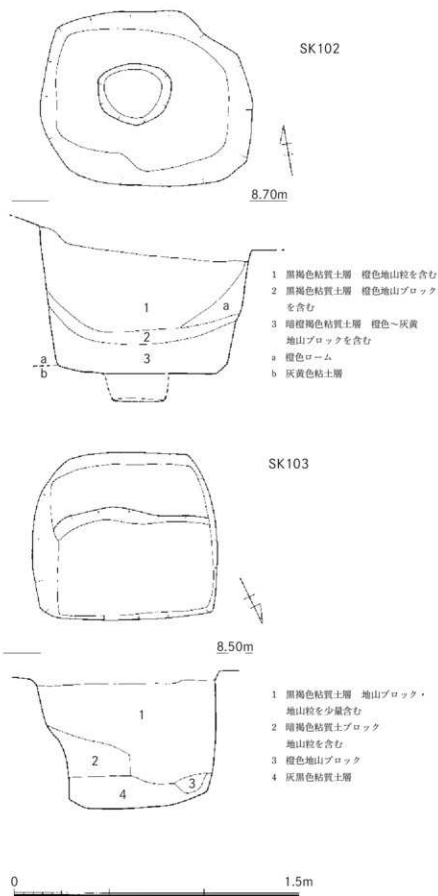


図45 Ⅱ区 SK102・103 実測図 (S=1/20)



图 46 179 次調査Ⅲ区遺構配置実測図 (S=1/200)

## 第VI章 III区の調査 (図46、図版9～43)

III区は、I区北東にあたる調査区である。II区で検出された東西方向の溝SD05の延長部の確認を目的とした。I区西側で確認された建物の基礎による削平は北側につづくことから、削平による落層を調査区の西限とした。また北側で建物の基礎による攪乱を確認したため北限とした。調査面積は526㎡である。

検出された遺構は弥生時代の貯蔵穴1基、6世紀代の住居跡、10世紀代の木棺墓1基である。またSD05は、III区で35mにわたって直線的にのびていること、調査区西側の削平によって途絶えていることが確認された。

### SK39 貯蔵穴 (図47、図版43)

調査区中央で確認された弥生時代の貯蔵穴。上部は削平をうけ、検出面のプランはAで2.3m、Bで2.0mをはかる。底はプラスチック状に広がっており、Aで2.7m、Bで2.45mをはかる。深さは70～90cmで、本来の地表は現況より1m以上は高かったとみられる。東側にある長楕円形の穴は板梯子を固定するための土坑か。

SK39 出土遺物 (図47) は弥生土器破片と石器1点である。1は複合口縁壺の口縁部。後期中頃のやや大型の器種である。2は頸部から胴部上半にかけての破片。時期は同時期だが同一個体ではない。3は弥生土器の底部破片である。4は弥生中期の甕の底部。5は磨石。扁平な円礫の両面に叩打痕がみられる。

今回の調査で検出された弥生時代の遺構は本例に限られる。高床倉庫の普及と反比例して貯蔵穴は減少する傾向が指摘されている。床面で標高8mの台地に立地し、群在しないという特徴があるが、7世紀代の開発によって弥生時代の遺構の多くは失われてしまった可能性がある。I区では青銅器鋳型が出土しているので、SK39だけをもって調査地周辺の弥生時代の遺構が希薄だったと結論づけるには危うさを感じる。

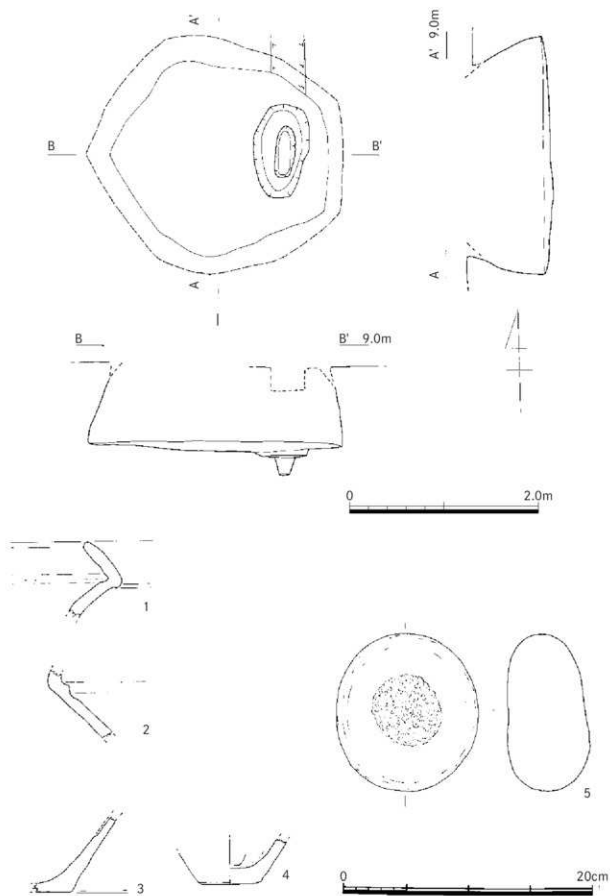


图 47 III区 SK39 贮藏穴·出土遗物 (S=1/40·1/3)

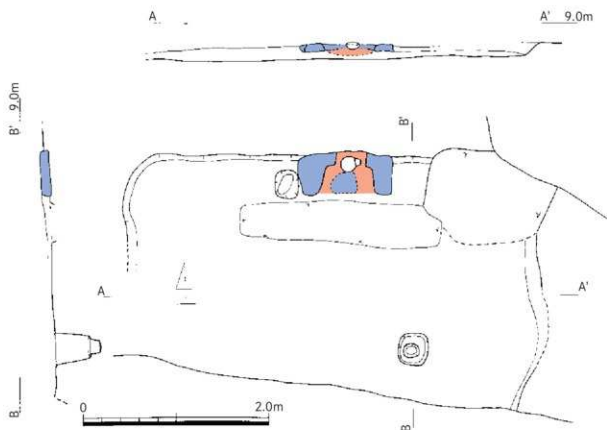


図48 III区 SC54 実測図 (S=1/40)

III区 SC53・54・56、SX61 出土遺物 (図48・49)

6・7は蓋環。暗灰色を呈し、焼成は堅緻。8は土師器の小型の甕か。9は褐色で細密な胎土をもつ。高環の受部か。10は土師器の底部。底に板状の圧痕がみられる。11は蓋環のいずれか。

SC54 (図48)

III区南東部のSD05に切られた住居跡。北壁の中央に造りつけの竈をもつ。竈中央には14の甕が据えられた状態で出土した。もともと一辺5mほどの方形プランの住居跡か。壁面から床面まで15cm程度の壁を遺存する。

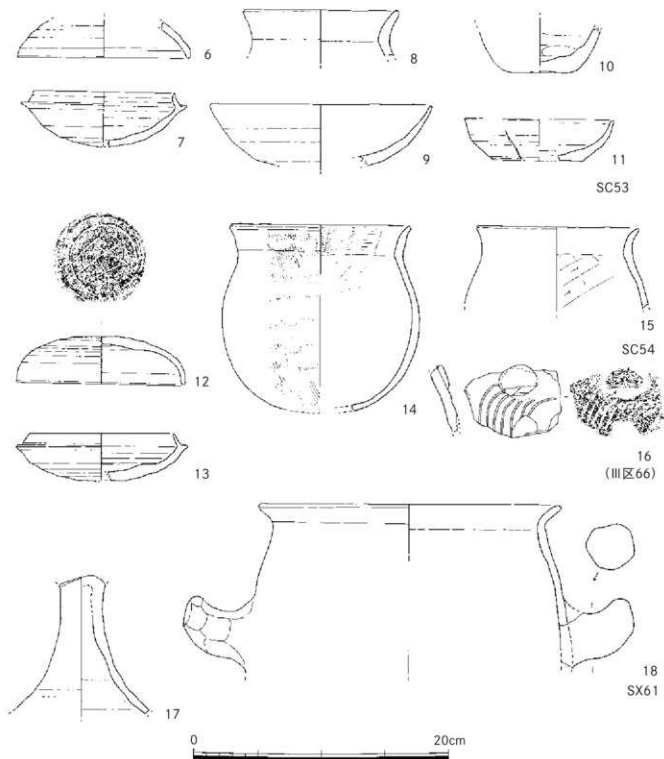


图 49 III区 SC53·54·56、SX61 出土遺物 (S=1/3)

SC54 出土遺物 (図 49)

12・13 は蓋環。12 の蓋にはヘラ記号がみられる。青灰色を呈す。13 は坯身。青灰色を呈し、胎土は精良で堅緻。IV A 期。14 は SC54 の竈で出土した土師器の壺である。暗褐色を呈し、口縁から外面にかけてハケ目が施されている。15 は土師器の小型の甕。被熱の痕跡があり、橙色を呈している。

16 は弥生後期の壺の破片。弧文を加えたのちに円盤状の浮文を貼付する。暗黄灰色を呈し、胎土は軟質である。

SX61 (図 49)

17 は橙色を呈する高坏の脚部である。もともと須恵器を意図してつくられたとみられる。18 は土師器の把手付きの甕である。把手の断面は円形を呈し、暗褐色を呈する。

SK62 木棺墓 (図 47、図版 39～42)

Ⅲ区北部で単独で検出された。墓壇は長辺 2.42m、短辺 0.73 m で床面までの深さは 0.55 m。下端は西で 0.56 m、東で 0.54 m をはかる。墓壇内で黒色土器の椀 2 点と床面で土師皿 3 点が出土した。黒色土器の 1 点は高台を内側に向けて床面から 15cm ほど上で検出された。これは棺の上に供献されたものが、棺が朽ちる際に墓壇との空間にはさまったものと推察される。下端の幅は西側が若干広いが、頭位を確定するとはいえない。

SK62 出土遺物 (図 50、図版 42)

19・20 は黒色土器の椀。19 は口径 15.7cm、器高 5.7cm、20 は口径 14.7cm、器高 5.7cm をはかる。内外にヘラ研磨痕跡が観察される。土師皿 3 点 21～23 は径 10.1cm で高さ 1.0～1.2cm でヘラ切底である。時期については 10 世紀代と推定される。



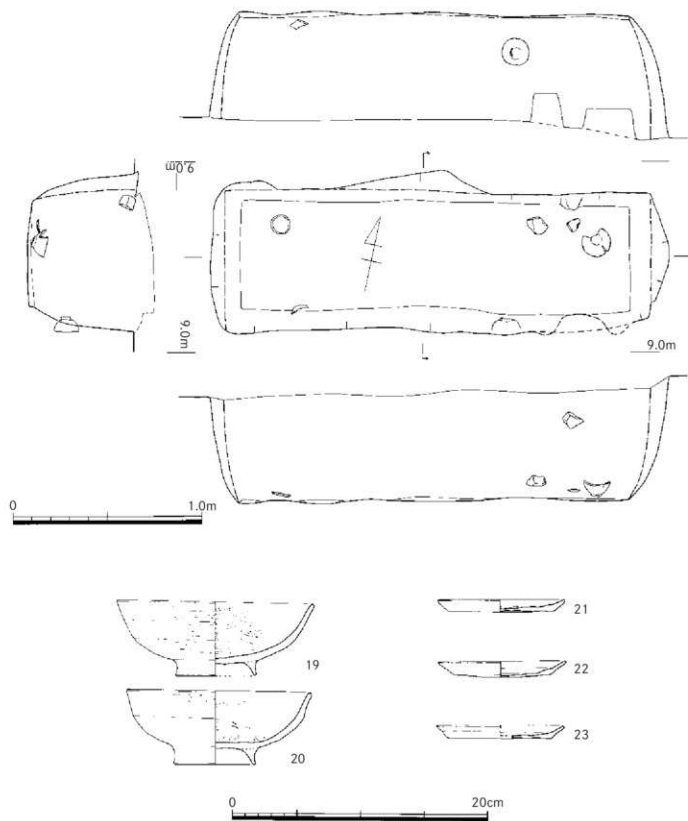


図50 III区 SK62 木棺墓・出土遺物 (S=1/20・1/3)

## 第七章 SD05 II・III区 (図51、図版33～39)

II・III区を横断するSD05は、長さ60m以上をはかる東西方向の溝である。東側をA区とし、10m間隔でG区までの土層ベルトで調査区を設定した。さらにA区から東側延長部をZ区として延長し、隣接する青果市場跡地にトレンチを設定し延伸の状況を確認した。その結果SD05は、台地の落際と推定される境界道路部で終結していることが確認された。

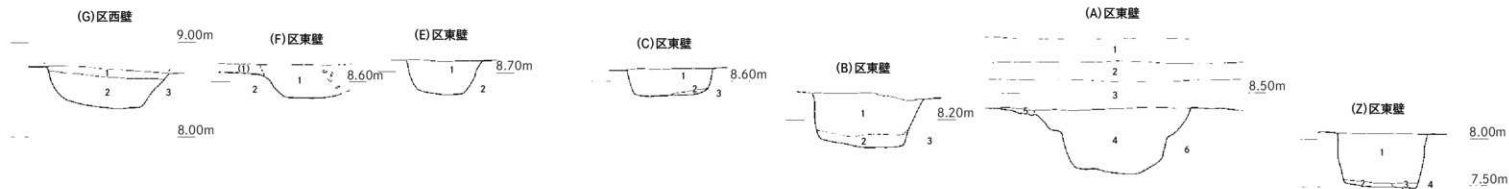
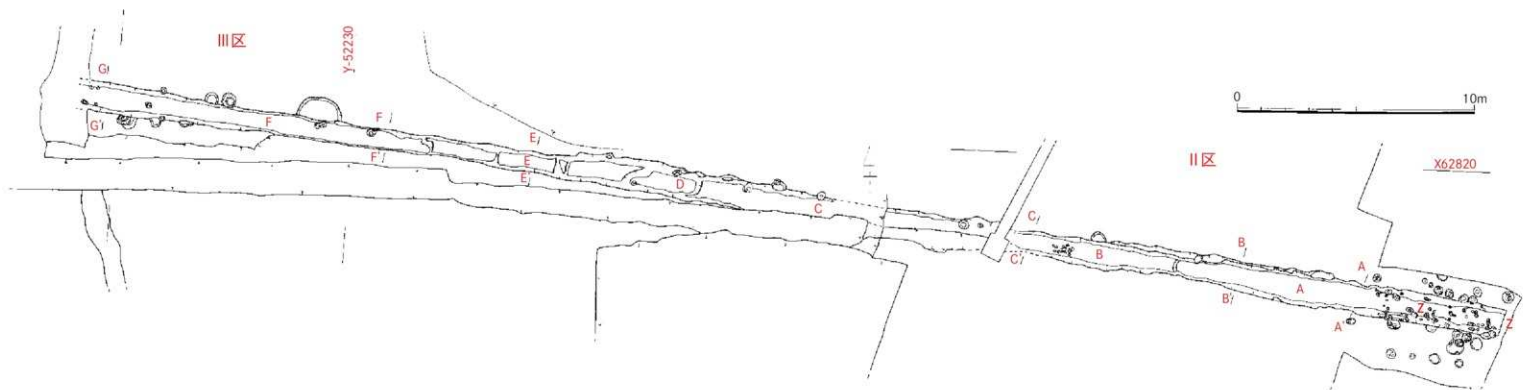
土層は水没によって失われたD区を除く7か所で記録を行った。溝の断面は逆台形を呈しており、底の標高はG～Cまでは8.35～8.48mまで10cmほどの高低差であったものがB区以東は比高差1mほどの急傾斜となる。これはSD05が東にむけて排水機能があったことを示している。拡張区であるZ区では溝の両側から底にかけて杭の痕跡とみられる小穴が多数検出されている。溝の落際に柵状の遺構があった可能性がある。

SD05 地点ごとの溝底の標高 (Gは西、Zは東)

G	F	E	C	B	A	Z
8.35m	8.42m	8.48 m	8.44m	7.95m	7.65 m	7.5m

### SD05 出土遺物 (図52～55)

1は坏蓋のつまみ付近である。2は高坏の脚部。3は蓋坏の蓋、楕円形のヘラ記号を重ねる。4は高台付椀。高台部の端部は外側に広がる。5は蓋坏の蓋、ヘラ記号がある。6は壺の胴部。7は坏蓋の高台付近である。8は甕の把手部、断面は円形に近い。9は初期瓦である。内面に摸骨状の縦方向の筋と布目瓦痕がみられる暗黄灰色を呈する。10は外面に縄目タタキのある平瓦の破片である。黄灰色を呈し内面は黒変している。11は初期瓦の平瓦。橙色を呈し、石英・雲母粒を多く含んでいる。12・13は蓋坏の蓋である。12には上部にヘラ記号がある。14は高台付椀の高台部である。端部は外反している。15は壺の頸部から肩にかけての部位である。16・17・18は甕の把手部、断面は横長の楕円形に近い。19は蓋坏の底部。20は土師質の高坏の脚部である。21は甕の把手部、断面は円形に近い。22は蓋坏、上部にヘラ記号がある。23は甕の口縁部である。硬質で斜めのヘラ切り文を施す。24・25・28～31・32は蓋坏である。26・28・30にはヘラ記号がみられる。27は須恵器の盤である。33は縦に切り込みがある角形把手である。34は甕の把手部で断面は横長の楕円形を呈している。36は土師質の高坏の脚部。35・37・38・39・40は初期瓦の破片。35は初期の平瓦か。明褐色を呈し、図上端部が黒変する。37は初期瓦の破片。暗黄灰色を呈し内面に杵の痕跡がみられる。38は丸瓦の破片で内面に摸骨を外したのちに×の篋記号を加えている。橙色を呈する。39は初期瓦の縁部。橙色を呈し、内面には布目瓦痕がみられる。40は初期の平瓦の破片。橙色を呈し、内面に布目瓦痕がみられる。41・42は蓋坏。41は青灰色を呈する。42は坏身で底部にヘラ記号がみられる。



- G ベルト西壁 1 黒灰色土層 2 暗褐色土層 3 暗橙色土層 (地山)
- F ベルト東壁 1 暗褐色土層 (1) 黒褐色土層 (住居跡の埋土) 2 暗橙色土層 (地山)
- E ベルト東壁 1 暗褐色土層 2 暗橙色土層 (地山)
- C ベルト西壁 1 暗褐色土層 2 橙色土層 3 暗橙色土層 (地山)
- B ベルト東壁 1 暗褐色粘質土層 2 明橙色土 + 暗褐色土層 3 暗橙色土層 (地山)
- A ベルト東壁 1・2 整地層 3 暗褐色土層 (包含層) 4 暗褐色土層 + 橙色地山ブロック 5 暗灰色粘質土層 6 暗橙色土層 (地山)
- Z ベルト東壁 1 暗褐色土層 2 暗褐色土層 + 八女粘土粒子 3 八女粘土 + 褐色土粒子 4 八女粘土層 (地山)

図51 II・III区 SD05 実測図 (S=1/160・1/40)



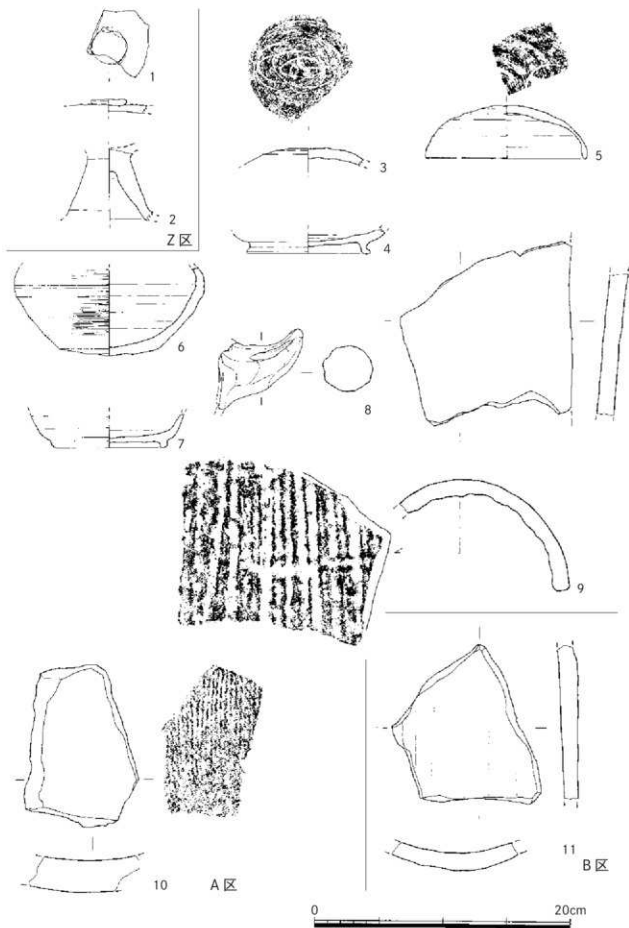


图 52 II区 SD05 出土遺物 1 (S=1/3)

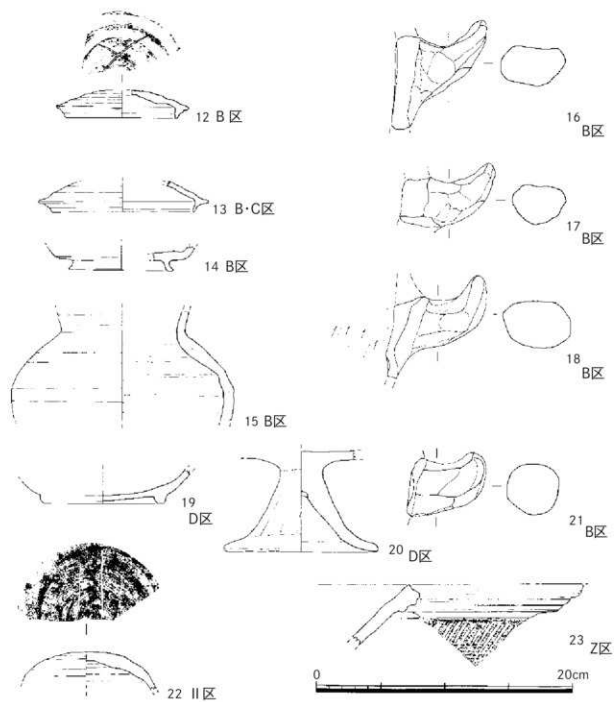


图 53 II区 SD05 出土遺物 2 (S=1/3)

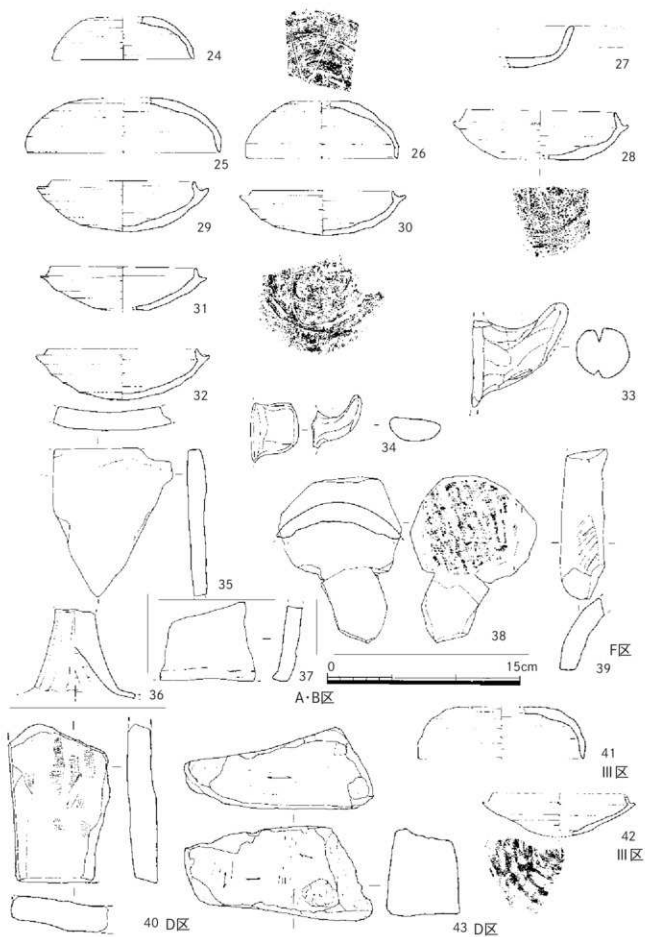


图 54 III区 SD05 F・D区ほか出土遺物 3 (S=1/3)

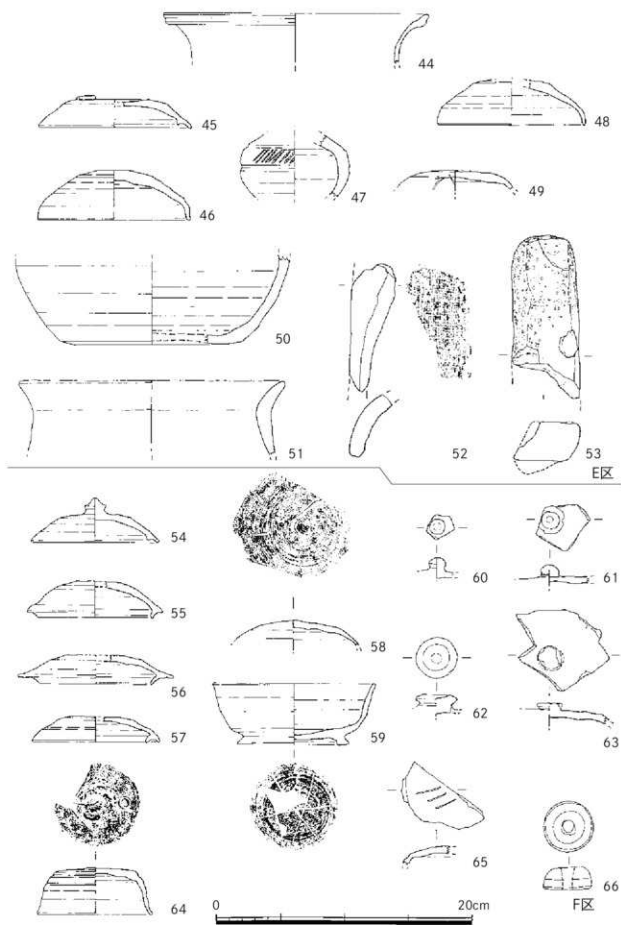


图 55 Ⅲ区 SD05 E·F区出土遗物 4. (S=1/3)



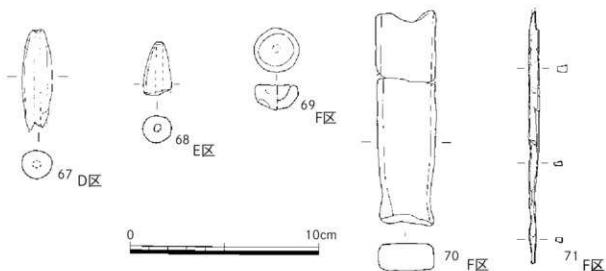


図56 III区 SD05 D・E・F区出土遺物5 (S=1/2)

43は折損した砥石の破片である。砂岩製。44は甕の口縁部か。45・46は蓋環。47は甕の胴部。沈線の間に木口による斜方向の施文がある。48・49は蓋環。50は瓶または壺の底部。51は土師器の甕口縁部。52は初期の丸瓦の破片。橙色を呈し、内面に布圧痕がみられる。53は柱状の磨製石器。54～58は蓋環の蓋部である。59は高台をもつ蓋環。高台の端部は外反する。60～63は蓋環のつまみ部である。64は容器の蓋。上部に竹管による施文がある。65は蓋環の上部である。66は滑石製の紡錘車。

67・68は土錘。69は小型の手握ね土器。70は甕底部中央の橋梁の部分である。71は不明鉄製品。上部の穿孔部に棒状の金属が嵌っている。

SD05出土遺物は、IV B期～VII A期までの時期幅がみられる。7世紀に掘削され排水機能をもつ溝として使われたのち8世紀前半までに埋まった。埋土の層位はほとんど単一である。

## 第八章 IV区 (図 57・58)

調査地の北西に設定した調査区。標高 8.1m 程度。調査区東端で検出された南北方向の溝状遺構は I 区で検出された区画溝 SD02 の延長部とみられる。調査面積は 150㎡。調査区西側で 1 間 × 1 間の掘立柱建物を確認した。図化できる遺物は出土していない。

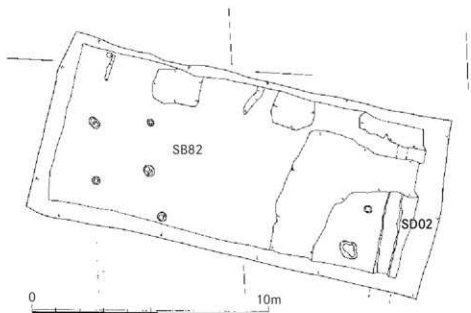


図 57 IV区遺構配置実測図 (S=1/160)

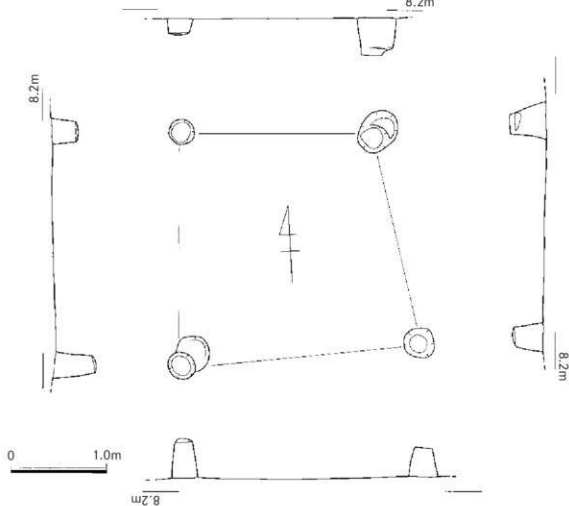


図 58 IV区 SB82 実測図 (S=1/40)

## 第IX章 結語

### 比恵・那珂遺跡群の概要

『魏志倭人伝』には、宋・遼国、伊都国、奴国など支那遼沿岸域についての紀行文がある。比恵・那珂遺跡群（福岡市博多区）は、南北3 km・東西0.7 km（比恵65 ha、那珂83 ha）の台地に分布する大規模集落で、2023年までに約360地点（比恵160次、那珂195次）で発掘調査が行われてきた。

比恵・那珂遺跡群は、博多湾岸部に形成された砂丘に立地する博多遺跡群の後背部に展開した。弥生中期後半から後期にかけて比恵遺跡群を北から西に幅5 m、深さ2 mのクランク状に掘られた大溝の周辺では掘立柱建物の倉庫が集中することから、大溝は物流機能をもつ運河のような水路だったと考えられる。

比恵遺跡群1次調査では水路の北東で一辺30 m四方の区画溝と大型建物の一部とされる柱穴や井戸が見つかった（1号環溝・鏡山1972）。1次調査の近郊では1辺70 mや40 m、90 mの長大な溝が追認された（2～4号環溝）。これらの溝は有力層の居館などを囲む区画溝であった可能性がある。また2次調査で検出された1辺10 mの周溝状遺構は墓に近接する祭祀の場だったようだ（94集）。

那珂遺跡群西側の竹下駅の近くでは外径100 mの二重環濠をもつ集落が検出され（37次）、稲作開始期に板付遺跡とならぶ環濠集落の存在が明らかとなった（366集）。

比恵・那珂遺跡群では前2世紀頃（中期前半）に木柵墓や甕棺墓を溝で囲った区画墓が築かれた。比恵遺跡（6次）の甕棺墓では絹布を巻いた細形銅剣が出土した（94集）。前1世紀頃（中期後半）には那珂遺跡の北側（21次）で一辺約30 mの大型区画墓が築かれた。区画内の埋葬遺構の多くは、削平されていたが丹塗りの祭祀土器がまぎって出土した（291集）。

比恵・那珂遺跡群では銅矛・銅剣・銅戈などの青銅器やガラス製品の生産につかわれた石製や土製の鋳型、取瓶が出土している。とくに那珂遺跡（125次）で出土した巴形銅器の鋳型は、江戸時代に井原謙清（糸島市）で出土した巴形銅器と同型式であることから、福岡平野でつくられた銅器が1世紀の「伊都国王」の墓に副葬されたことがわかった（1155集）。1～2世紀、福岡平野は青銅器やガラスの生産拠点、糸島平野は中国鏡や装身具が集中する有力層の墓、というように、東西で機能が分かれていたようだ。

3世紀には福岡平野で最古とされる前方後円墳、那珂八幡古墳（全長75 m）が築造された（141集）。この頃、全長2 kmにわたって比恵・那珂の丘陵の中央を貫く道路が整備された。道路状遺構は両側に側溝をもつ幅6～7 mの構造だが、比恵遺跡群では中期後半から後期（前1世紀頃）にさかのぼる道路の側溝がおよそ1 kmにわたって確認されている。那珂八幡古墳は道路状遺構を意識して築造されたとみられる。

比恵・那珂遺跡群は稲作開始期には二重環濠をもつ集落がつくれ、中期前半から後半になると区画墓が築造された。中期後半には運河と倉庫群、道路状遺構など先駆的なインフラを備えながらも、海岸から奥まった立地の拠点集落として古墳時代後期から古代まで長く機能したのである。

#### 【参考文献】

福岡市博物館 2015「新・奴国展」特別展 新・奴国歴史委員会 ※集の数字は福岡市埋蔵文化財調査報告書の番号をさす  
鏡山猛 1972「九州考古学論攷」

### 6・7世紀の比恵那珂遺跡群（図59・60）

比恵遺跡群8・72次調査では3×3間の東西方向に長い長方形プランをとる総柱建物がこれまで10棟検出された（116・663集）。これらの倉庫群の南北には3本柱が一組となり、複面状の柱配列をとる柵状遺構によって囲まれている。また建物群は出土した須恵器の時期から上限は6世紀後半の早い段階に築造されたと推定される。

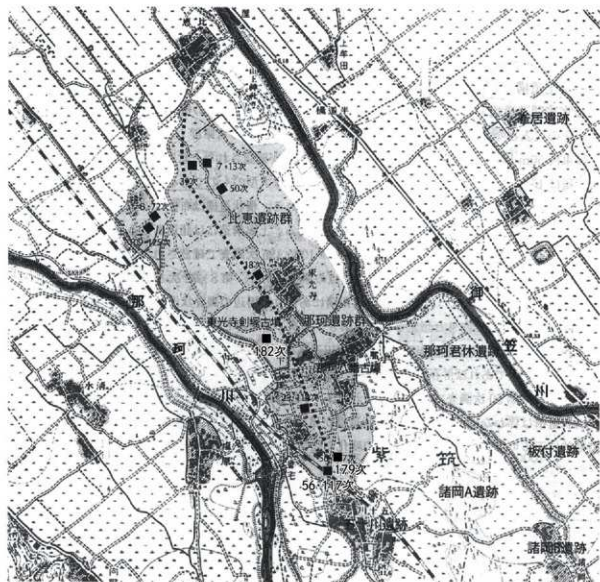
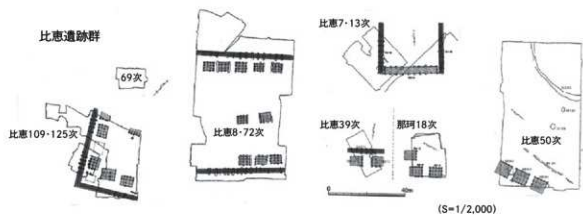


図 59 比惠・那珂遺跡群における古墳時代後期～古代の遺構分布

これらの状況から倉庫群と櫓状遺構は『日本書紀』宣化天皇元(536)年条にある「修造官家那津之口」、「那津の口に官家を修り造てよ」の『那津官家』記述に相当する。那津官家は、6世紀はじめの磐井の乱や、朝鮮半島情勢の緊迫化を背景に、九州北部の支配と防衛強化のため、大陸への窓口であるこの地に置かれた政治的・軍事的拠点とみられる。

比恵遺跡群8・72次調査区と道路を隔てた西側の125次調査ではやや小規模の倉庫群と櫓状遺構が検出されており、那津官家の規模は当初より広がるのが事実となった(1237集)。

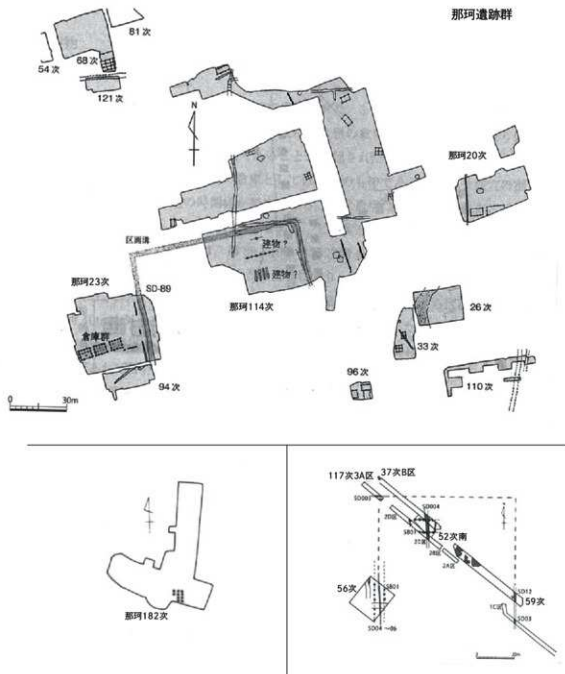


図60 那珂遺跡群における古墳時代後期～古代の遺構分布 (S=1/2,000)

これまでの調査で古墳時代前期に整備された並列溝の両側には総柱建物や柵状遺構などが次々と確認されてきた。那珂丘陵の中南部にあたる那珂遺跡群を中心に7世紀代の初期瓦の分布や区画溝の様相が明らかになってきた。那珂中央公園の整備に伴う114次調査区を中心に概観する(1082集)。

114次調査区西側の23次調査では梁行3間、桁行4間の総柱建物3棟が桁をそろえて検出されていた(254・290集)。総柱建物の東では桁に直行する東西90mの区画溝SD89では牛頸神ノ前窠および月ノ浦タイプの初期瓦が検出された。23次SD89は114次調査で検出された溝2020・2040と軸方向が共通しており、東西90m規模の区画溝の東端に復元される。

114次北西の68次調査(639集)ではすでに総柱の大型建物が報告されており、遺構は北西方向に広がると想定されていた。2020年度に実施された182次調査では総柱建物跡が検出され、8世紀代に廃棄された土坑SK08ではまとまった量の初期瓦の瓦当が出土した(1474集)。

114次調査で検出された並列溝は道路の側溝で、東側溝の南延伸部は、48次調査区(455集)を経て那珂遺跡群南端にあたる179次調査区西端のSD01につながる。那珂遺跡群の並列溝は古墳時代前期に整備されたと考えられるが、7・8世紀が下限となるようである。

179次調査ではⅠ区で検出された廃棄土坑と(SK71・72・73・76)Ⅱ区の住居跡SC11と掘立柱建物SB56・67、Ⅱ・Ⅲ区で検出された全長60mあまりの溝SD05が検出された。

Ⅰ区東側拡張区の廃棄土坑(SK71・72・73・76)ではⅣA期～ⅣB期を主体とする須恵器に土師器と少数の初期瓦が伴って検出された。7世紀前半までに廃棄されたとみられる。近接するSC74には廃棄土坑の下限であるⅣB期の須恵器が出土した。

Ⅱ区の住居跡SC11はSC17、SC19、SC22とくらべ平面規模が大きく壁の残りがよい。貼床構造をもつⅢB期の中心的な遺構である。

Ⅱ・Ⅲ区を横断する東西溝SD05は、東側への排水機能を備えた溝である。出土遺物はⅣB期からⅦA期まで幅をもつ。調査地はⅢ区の貯蔵穴SK39が少なくとも1m程度削平をうけているのでSD05はもともと深く掘削されていたと考えられる。以上、那珂丘陵南部の179次調査で得られた所見は以下のとおりである。

#### 179次調査で検出された主な遺構

- Ⅰ区SD01・・・・・・・・並列溝の東側側溝。ⅦA期(8世紀前半)を下限とする。
- Ⅰ区土坑(SK71・72・73・76)・・・・・・・・ⅣA期～ⅣB期(7世紀前半)を主体とする廃棄土坑。
- Ⅰ区SC74・・・・・・・・ⅣB期、7世紀前半。
- Ⅱ区SB56・67・・・・・・・・7世紀前半以前か。
- Ⅱ・Ⅲ区SD05・・・・・・・・ⅣB期～ⅦA期まで時期幅がある。ⅦA期(8世紀前半)を下限とする。

#### 【註・参考文献】

- 菅波正人 2020 「古代1 比恵遺跡群/那珂遺跡群」『福岡市史 考古②遺跡からみた福岡の歴史—東部編—』福岡市  
 ☆集の数字は福岡市埋蔵文化財調査報告書の番号をしめす。  
 酒井仁夫(編)1979 「神ノ前遺跡」『太宰府町文化財調査報告書』第2集、太宰府町教育委員会  
 舟山良一(編)1993 「牛頸月ノ浦遺跡群」『大野城市文化財調査報告書』第39集、大野城市教育委員会

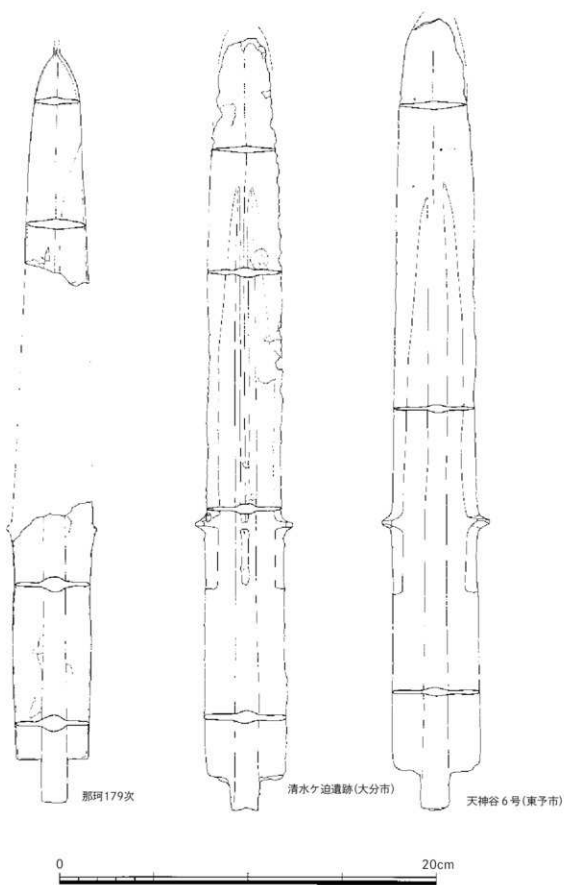


図 61 179次調査出土鑄型による復元モデル (S=1/2)

## 青銅器鑄型について

SK04 出土の鑄型は、青銅武器の先端部にあたる A 面と銅劍の節帯から関部、湯口である莖部にあたる B 面からなる両面版である。

A 面には、鋒部から 10cm の位置に樋の先端が彫られている。候補となる銅劍、銅矛、銅戈の中、古段階の矛の樋は研ぎ出しによるものであるため除外される。戈では石材が現状の幅の範囲内と考えると樋の最大幅は 6.5cm ほどとなる。樋の先端が分かれる型式で、鋒部から樋の先端までが 10cm ほどの該当例は思いつかない。

ここでは A 面を銅劍の鋒部と仮定し、節帯以下は B 面と同型式と仮定して復元を試みる。まず A 面の銅劍は鋒部から樋の先端まで約 10cm というのが型式上の大きな特徴である。韓国西部の葛洞遺跡（全羅北道完州）出土の銅劍鑄型では樋は彫りこまれておらず、銅劍に研磨を加えることで樋が形成されることがうかがえる（金他 2005）。このため細形銅劍では鋒部から樋の先端までは 5cm 前後となる例が多い。初期の銅劍で鋒部から樋の先端までの長さが約 10cm をはかるのは研ぎ直しがくり返された結果によるものであるが、鋒部から樋の先端までが同様な数値をもつ例は全体から見れば少ない（常松 2000）。A 面のように鑄型に樋が彫られるのは仕上げの研ぎを最小限に抑えることが前提となっているからであろう。

B 面では節帯の突起部から関までは 12.3cm、脊の断面は扁球形で厚みは 0.6～7cm 程度である。これは当初から厚みのない銅劍の製作を意図したもので、A 面の特徴とも矛盾しない。

以上から図 61 の左の銅劍が復元された。復元全長 40.3cm、鋒部から樋の先端までの長さは約 10cm で、節帯の幅は 5.0cm、関幅 3.8cm の身幅が狭く薄手の銅劍が想定される。

復元図に近い資料として平形銅劍の初期の型式である清水ヶ追遺跡（大分市）と天神谷 6 号銅劍（東海市）をあげることができる。

清水ヶ追遺跡の銅劍は瀬戸内地域に分布する平形銅劍の古段階の資料として知られている。現存長 41.6cm で節帯の突起部の幅は 5.3cm で直下の刃部から脊にかけて研ぎが加えられている。関幅は 4.2cm をはかる。

天神谷 6 号銅劍は、現存長 41.6cm で節帯の突起部の幅は 5.6cm で、関幅は 4.5cm をはかる。清水ヶ追につづく型式である。

179 次調査の鑄型については、鋒部から樋の先端までの長さが約 10cm をはかり身幅が狭く薄手であること、関部から節帯までのふくらみが少ないことから平形銅劍のプロトタイプの候補として位置付けたい。

比叡・那珂の丘陵では中期後半から後期中頃にかけての青銅器関連遺物が確認されている。その内訳は中細形銅矛・銅戈、広形銅矛、巴形銅器のほか取瓶や矛の中子などである。中期後半以後の鑄型は黄灰色で破断面に微細な光沢をもつ鉱物を含む石英長石斑岩が主要となる。本例について石材の同定は行っていないが色調は石英長石斑岩に比べて暗く、肌理は細かい印象をうける。土器など共存遺物がないため時期が特定できないのは残念である。

中期後半から後期の瀬戸内地域において盛行した平形銅劍は鋒部から基部まで扁平な形状を特徴とする。節帯の幅は当初幅 5cm 余りであった棘状突起は、後半の段階には 13cm 前後に発達する。鋒部から樋の先端までの長さは初期の段階でも 8～10cm ほどをはかる。鑄型の出土例は確認されていないが、初期の 2 例も扁平なつくりであることから樋は鑄出しによる可能性がたかい。

今回の検証によって、福岡平野の中央部で出土した青銅器鑄型の属性が出現期の平形銅劍にあたる可能性を指摘することになった。九州北部の青銅器生産の東方への波及という問題提起につながることを期待したい。

挿図の作成にあたり平形銅劍の実測図は下條信行氏の作成によるものである。あつくお礼申し上げます。

## 【註・参考文献】

- 福岡市博物館 2015 「新・奴国展一ふくおか創世記」特別展 新・奴国展実行委員会  
 金健洙（他）2005 「完州葛洞遺跡」『湖南文化財研究院学術調査報告』第 46 冊、（財）湖南文化財研究院  
 常松幹雄 2000 「付録 北部九州の青銅器と鑄型に関する覚書」『福岡市博物館研究紀要』第 10 号、福岡市博物館  
 吉田 広 2001 「弥生時代の武器形青銅器」『考古学資料集』21、国立歴史民俗博物館春成研究室



北側遠景 1 (南から)



北側遠景 2 (南から)



南側透景 1 (北から)



南側透景 2 (北から)

I 区南西 SDO1 (南東から)



I 区南西拡張区全景 (南東から)



1区全景（北東から・2020年4月）



I・II・III区全景（北東から・同4月）



I区全景（北東から・2020年5月）



I区西側全景（北東から・同5月）



I区 SE03 半掘状況 (北東から)



I区 SE03 完掘状況 (北東から)

I区SK04 鑄型出土状況 (東から)



I区SK04 出土の鑄型 (南から)





I区廃棄土坑全景（北東から）



I区廃棄土坑SK71（東から）



I区廃棄土坑遺物出土状況（北東から）



I区廃棄土坑遺物出土状況（西から）



I区廃棄土坑遺物出土状況（北から）



I区廃棄土坑遺物出土状況（北から）



I区廃棄土坑 SK76 (北東から)



165



164



122



167



168



54

I区出土遺物 1



4



73



81



74



171



86



90



92



93



94



95



96



102



118



120



119



124



126



111



104



115





I区SC74 (東から)



I区東全景 1 (東から)





I区 SC74 竈跡 (西から)



I区 SC74 竈跡 (東から)



I区 SD43 中世地業 (南から)



I区 SD43 中世地業 (東から)



Ⅱ区全景（北から・2020年5月）



Ⅱ区SC11 (北から)



Ⅱ区SC11 (西から)



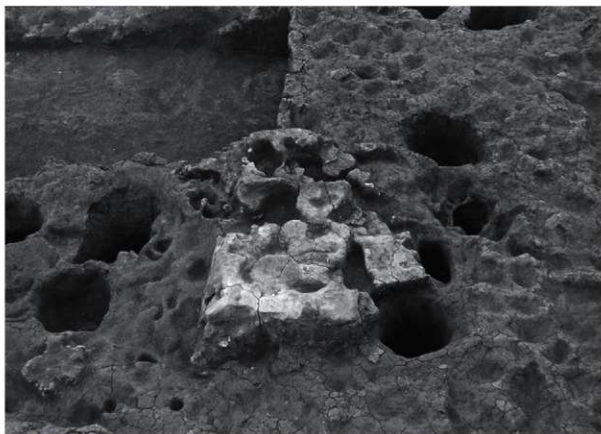
Ⅱ区 SC11 (西から)



Ⅱ区 SC11 (北から)



Ⅱ区SC11 (西から)



Ⅱ区SC11 (北から)



Ⅱ区 SC11 竈跡下層 (北から)



34



42



44



図 52-3



Ⅱ区SC22 (東から)



Ⅱ区SC22 (西から)





Ⅱ区 SC22 鳥形土製品出土状況 (西から)



Ⅱ区 SK08 (西から)

Ⅱ区SC17 (東から) 1



Ⅱ区SC17 (東から) 2



Ⅱ区 SC19 (東から) 1



Ⅱ区 SC19 (東から) 2



Ⅱ区 SK102 (南から)



Ⅱ区 SK103 (北から)



Ⅱ区 SE06 (南から)



Ⅱ区SK14 (南から)



Ⅱ区SK14 (東から)



Ⅱ区 SK15 (東から)



Ⅱ区 SK18 (東から)



Ⅱ区 SK10 上層 (東から) 1

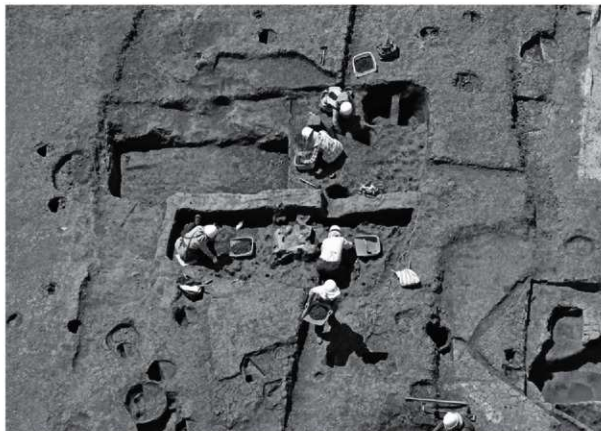


Ⅱ区 SK10 (東から) 2



Ⅱ区発掘作業風景（北から）





Ⅱ区 SC11 発掘風景（北から）



Ⅱ区 SD05 遺物出土状況（B区）



Ⅱ区 SD05 遺構検出状況（西から・2020年2月）



Ⅱ区発掘作業風景（西北から・同3月）

II区SD05 (西から)



II区SD05 拡張区 (西から)

Ⅱ区SD05 A区(西北5)



Ⅱ区SD05 A·B区(西北5)



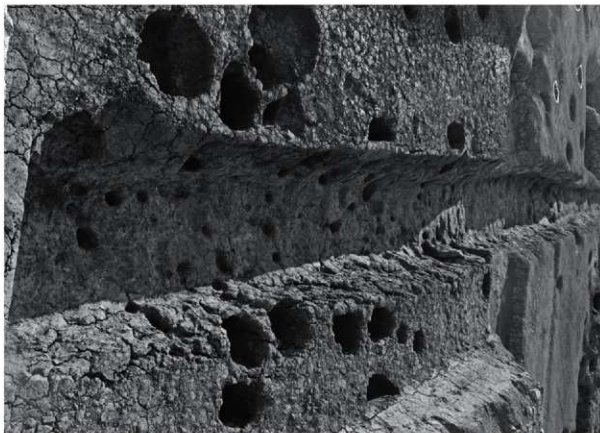


Ⅱ区全景（東から）



Ⅱ区 SD05 A・B区（西から）

Ⅱ区SD05 Z区(東から)



Ⅱ区SD05 Z区土層(西から)



Ⅲ区全景（北西から）



Ⅲ区全景（西から）



Ⅲ区 SK62 発掘風景 (北から)



Ⅲ区 SK62 (西から)





Ⅲ区 SK62 (北から)



Ⅲ区 SK62 (東から)

Ⅲ区 SK62 (墓内)



Ⅲ区 SK62 出土遺物



Ⅲ区 SK39 (南から)



Ⅲ区 SK39 (南から)



II区SD05全景（西から）



II区東調査区全景（西から）



II区 SD05 (西から)



III区 SD05 (東から)

I区から南側をのぞむ (北から)



III区 SD05 SK39 (北から)



I 区拡張区作業風景1 (南から)



I 区拡張区作業風景2 (北から)



IV区全景 (南から)



IV区全景 (東から)



## 報告書抄録

ふりがな	なかきゆうじゅう							
書名	那珂90							
副書名	—那珂遺跡群第179次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1506集							
編著者名	常松幹雄							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
那珂遺跡群 第179次	福岡県福岡市 博多区 那珂6丁目333 番の1	40132	0085	33° 33' 55"	130° 26' 16"	2020.2.10 ～ 2020.12.18	2,586	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
那珂遺跡群 第179次	集落	弥生時代～中世	貯蔵穴・溝（水路） 掘立柱建物・土 坑・住居跡・木棺 墓・中世建物の基 礎（地業）	弥生土器・青銅器 銚型・トリ形土製 品・須恵器・黒色 土器・土師器・石 斧・石包丁・瓦	集合住宅の建設に よって遺構に影響 をうける箇所につ いての発掘調査を 実施した。			
要 約	<p>那珂遺跡群は、福岡平野の中央部、那珂川と御笠川にはさまれた標高約9mの丘陵上に位置する。調査地は、那珂遺跡群の南東部に位置している。</p> <p>南西のⅠ区では、古墳時代の道路の側溝、古代の区画溝・窪み、中世の井戸1基、6・7世紀代の住居跡・土坑、中世建物の基礎（地業）が検出された。</p> <p>東側のⅡ区では、6世紀代の住居跡・掘立柱建物が出された。</p> <p>南北にのびるⅢ区では、弥生時代の貯蔵穴1基、6世紀代の住居跡、10世紀代の木棺墓1基が検出された。</p> <p>またⅡ区～Ⅲ区にかけては7世紀後半の東西方向の溝を約60mにわたって検出した。溝は東に向かって傾斜しており、排水機能を有している。溝は東側隣接地では検出されていない。</p> <p>北西部のⅣ区では、Ⅰ区で検出された古代の区画溝の延長部が確認された。</p> <p>調査地は、那珂丘陵の最も東に位置している。7世紀代の溝や土坑は、九州北部の飛鳥時代の様相を解明するうえで重要である。また銅剣銚型は弥生時代の銅剣の製作にかかわる資料として、トリ形土製品は、古墳時代の祭祀の一端を示す資料として貴重である。</p>							
	<p>各調査区の概要</p> <p>Ⅰ区～西側 古墳時代の道路の側溝、古代の区画溝・窪み、中世の井戸1基 ※青銅器銚型</p> <p>東側 6・7世紀代の住居跡・土坑、中世建物の基礎</p> <p>Ⅱ区～6世紀代の住居跡・掘立柱建物 ※鳥形土製品</p> <p>Ⅲ区～弥生時代の貯蔵穴1基 6世紀代の住居跡、10世紀代の木棺墓1基</p> <p>Ⅱ区～Ⅲ区…東側に傾斜する7世紀後半の溝</p> <p>Ⅳ区～Ⅰ区で検出された古代の区画溝の延長部を検出</p>							

## 那珂 90

— 那珂遺跡群第 179 次調査報告 —  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1506 集

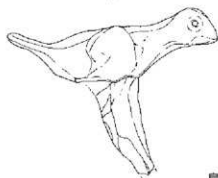
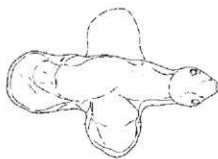
令和 6 年 3 月 22 日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印 刷 大野印刷株式会社



The General Report on  
the 179th. Survey of Naka Ruins



鳥形土製品

2024 Mar.

Board of Education of Fukuoka City